

特 101

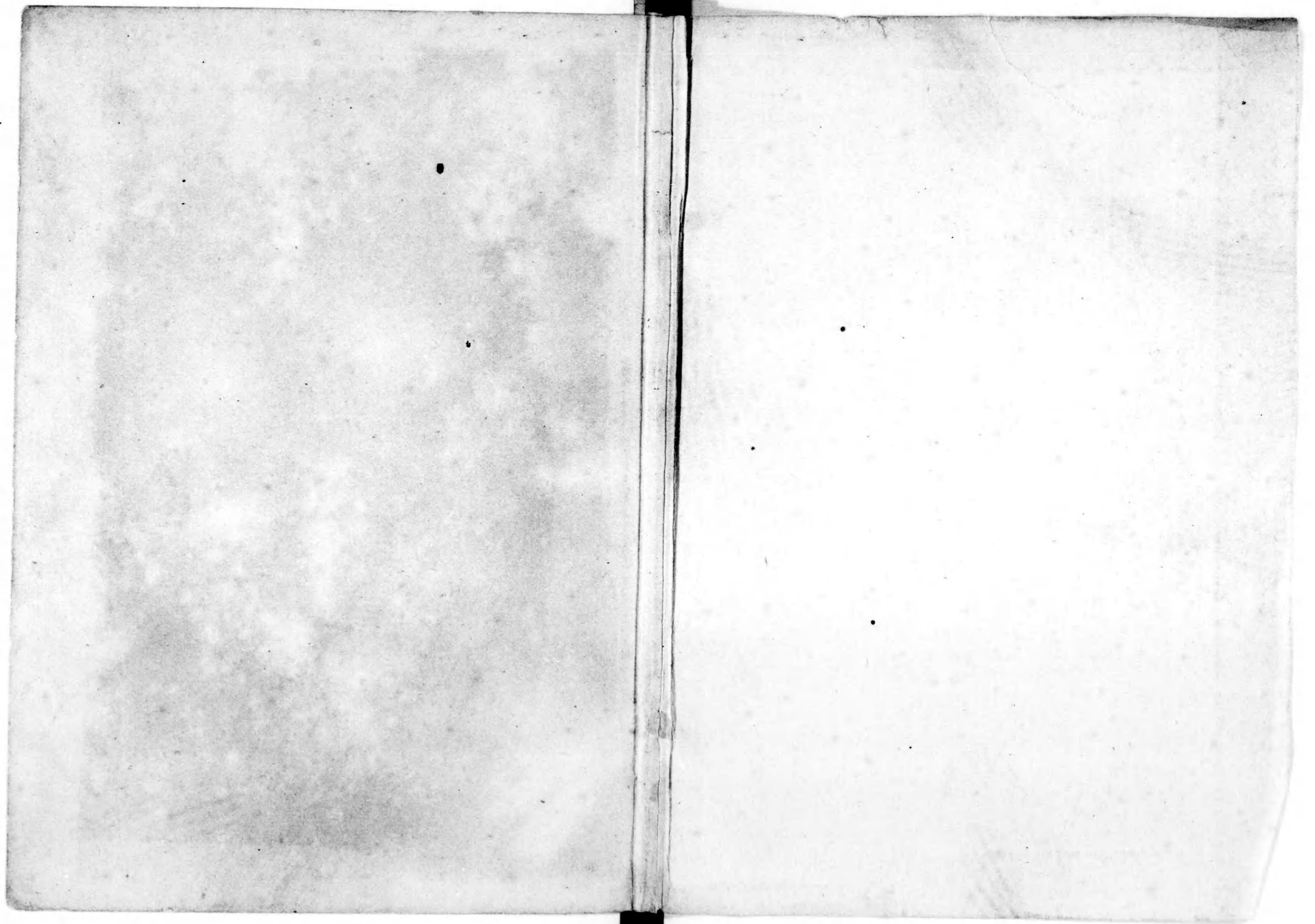
942

本日



始





特101

942



ま

唄

岡

鬼

太

郎

大正

7.4.16

内交

東京 南人社藏版



はしかき

あつま唄は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を見らるもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれか無駄を言はざりける。

鬼太郎

大正七戊午の歳衣更着

花	紫	(二)
初時雨		(三)
四つの袖		(七)
仇花		(一〇)
おもひすごし		(一三)
乳房		(一四)
黒髪		(一五)
行く春		(一八)
ひとと夜		(一七)
新梅曆		(一九)
雪		(二〇)
めぐりあひ		(二三)

◇目次◇

人質の女	(一九五)
金扇	(二二)
穴賢祝儀無祝儀	(三六)
端唄茶話	(三九)
立者貧弱揃	(四八)
豚兒亡劇	(五四)
役者濫用	(六一)
下廻り拂底	(六七)
役者の男衆	(七五)
俳優の御令聞	(八四)
今昔問答	(九三)
寄席の樂屋	(一〇〇)
諸藝昔話	(一一九)

あつま唄 岡鬼太郎

綺柳巷 花 紫

上之卷

浮世は色の中ノ橋を、少し東へ横折れて、板新道の左側、鶴松葉のお葉の住居、今茶の間の奥の二坪ばかりの中庭に向かつて、縁側で爪を剪つてゐる抱妓の君葉、渡りの向ふの六疊に、何やら地味な男物を縫つてゐる針妙のお道に、顔は上げずに聲ばかり掛ける。君「姨さん、爪を剪つて上げませうか。道」エツ。ト振向きはしても解せぬ體。君「よく剪れるのよ、危くも何んとも

なくツて。ト稼業柄でもまだ十七、内輪では何處かに見える娘風、ニツケル色の爪鉋を差上ぐれば、お道は銀縁の眼鏡越し。道「何んです、呼子の笛見たいな物。君」泥棒を捕へるんぢやないの、爪を剪る器械なの。道「器械で爪を剪るんですか。君」佛蘭西の專賣なの。道「へエ、日本にだって、鉋の外に金挾の様な爪剪がありますのに。君」アラ釘拔で爪を剪るの。道「昔は皆な抜いたもんです。君」随分ね、對手が知らないと思つて。道「ですが、君葉さん、餘り深爪を剪ると毒ですよ、第一指頭の形状が悪くなりますよ。君」それはチャンと申聞かされて居りますの、肉が爪へ冠さつて来て、外科醫者のやうに指の先が太くなるから止せツて、それでね、此の器械を。道「ア、それが云ひたいんで、爪を剪つてやらうなんて、何うも餘り御深切ですから、雪でも降らなきや好いと思ひましたよ。君」解かつて、エ姨さん、ハイカラで好いでせう。道「殿い残暑で御坐います。ト笑つてゐる、君葉は爪擦を使ひ始める、處へ裏

口からズツと入来りしは、お葉の樂み瀧野其一とて、同じ區内の采女町に洋酒食料品の問屋を営む人の跡取り息子、然る大學の理財科卒業後、店を預かつて今實地修行の角帶姿、堅い服装はしてゐれど、苦勞人の目からは免れぬ碎けた風采、君葉は急に身繕ひして。君「入らッしやい、早くから何方へ。ト云ふにお道も、膝の上のもの片寄せて挨拶する。瀧「朝つからお粧飾だね、ぶら小路に逢ふ日かエ。君「又そんな、人の顔さへ見れば。瀧「だッて、云つてやらなきや御機嫌が悪いぢやないか。君「エ、そりやア然うよ。瀧「阿容々々とした奴だな。ト薄羅紗の帽子で、立ちながら君葉の肩のあたりを敲く。道「あなた、擲つて上げて下さい、今も其の爪剪器械で、こんな齡を取つた者に散散つ腹。君「嘘をお吐きなさい、イザこれからと云ふ處へ。瀧「何んだッて。君「イ、エもう好いの。瀧「好くないよ。君「アラ操つちや忌。瀧「誰が操つたエ。君「だッて、そんな風して、ア、何んだか體がムヅくする。ト爪剪と木賊

を持つて立上がる。瀧「何うせぶら小路の若様のやうには参りません。君「彼方へ入らッしやいよ、姐さんが二階に待つてゐてよ、一日逢はなかつたら瘦せほつたくなつたッて。ト小聲に云ひながらも逃腰になつてゐる、瀧「野は態と舌打して、一寸睨む眞似をする。君「何か奢つて頂戴よ、ヨウ。瀧「裏の氷小豆でも奢つてやらう、お芋を賣つてゐる氷屋にやア、もうアイスクリームはあるまい。君「氷なんぞは野蠻人の食べるものですね。瀧「此奴、ぢやア唯の小豆か蜜豆。君「良人が然う申しました、そんな物は通人か市村座の御定連の食べるものですッて。瀧「洋食は銀行の縁の下に限るなんて、變な事を云ふなアお前だらう。道「何んですか大層揉めますね。トお道が遠くから口を出すに。瀧「ぶら小路め、覺えてゐる。ト瀧野は笑ひながら奥二階へ上がつて行く、君葉がぶら小路ぶら小路と擲掄はれるは、男爵綾小路と云ふ公卿華族の若殿にて當世仕立の文學士と、互に嬉い仲ゆるゑなり、二階の三疊の先の六疊、南窓

の明けてある處に、着物の始末をしてゐるは、今年三十三になる土地で指折の姉株、此の鶴松葉の主人お葉、瀧野を見るなり頭を下げて。葉「入らッしやい。ト身を捻向け、及腰ながら麻の座蒲團を取つて出し、自分の前に坐らせる。瀧「もう朝晩は風が涼いな。ト瀧野は胡坐をかいて、窓から外の物干場の方を見る。葉「何處へ。瀧「新橋の際の仲間の處へ一寸来たから。葉「今片付けて了ひますよ。ト直ぐに箆笥の抽斗を締め、出した着物は鬱金の風呂敷に假りに包みて。葉「十月と云ふ聲を聞くと、裏の附いた衣も遣つて置かなきやならないんで。瀧「姨やの縫つてゐるのも阿父さんのだらう。葉「暑いくと云つてゐる中に、恰の支度が要るんですもの。瀧「お互に齡を取る譯だ。葉「それでも男は好在んすさ、四十が盛りで通るんですから。瀧「其の心算で精々若がつてはゐるんだがね、齡は争へないもんで、若い方へは些とも賣れない。葉「もう賣れないッて好いちやありませんか、百日足らずで三十七になるんでせう、

何時まで姉さんに苦勞させるんです。ト云ふは、瀧野の妻お八重の事にて、此のお八重元は日本橋の吉野家に本名を其儘の藝妓稼業、想ひ合つた末が纏まつての夫婦仲を、此方でも知つてゐれば、先方でも永い馴染を知つてゐる、其のお八重が自分より一歳年上なるゆゑ、お葉は常日頃瀧野の前では姉さん姉さんと云つてゐるなり、瀧野は卷蕘を一服しながら。瀧「何んの苦勞をさせるもんか、これでお前の顔さへ見たがらなきやア、乾固まつて仙人になる處だ。葉「それぢやア逢はずにゐて上げますから、仙人の罐詰をお店で賣出したら好いでせう。瀧「逢はずにゐてやる、洒落臭い事を云ひなさんな。葉「だつて、三日ぐらゐなら逢はずにゐますわ。瀧「馬鹿だな。ト笑ふ顔を嬉さうに熱と視ながら。葉「五年以來、逢ひ初めてから些とも變らないんですね、わたしと違つて、あなたは本當に氣樂だからねエ。瀧「家のが三十四歳、これが三十三歳、何方向いても夜着の袖だ。葉「本當にね、姉さんはまだ綺麗だけど、そ

れでも随分世帯染みてお了ひだし、此方は御覽の通りの婆ア女、あなた随分
 恨々するでせう。瀧「お互に其の分に甘んじてるなけりやならないのかと思ふ
 と、少し勇氣が挫けるな。葉「男の四十近いのと女の四十近いのを一緒にしち
 やア、些と殺生ですな、堪忍して上げるから、偶にや何かお爲なさいな。瀧「も
 う其様な根氣がない。葉「根氣も何も要るもんですか、あなたの技倆なら、今
 と云つて今のお間に合ひますよ。瀧「慾目だな。葉「又そんな嬉がらせを云ふ
 よ、あなたは、悪い癖だね。ト云ふ處へ、君葉が茶道具と蒸し芋の菓子皿に
 載つたのを持つて来る。瀧「悪い奴だなア、芋なんぞ買つて来やがッて。葉「君
 ちゃんのお奢りかエ。君「エ、。ト笑つて茶を注いでる。瀧「来ると早々聞か
 して置いて、面當に芋を奢るなんて、あの氷屋と怪いぞ。葉「干菓子ばかりも
 食べ飽きるわね、君ちゃん。君「然うでもないわ。瀧「あれだ。ト云ふ間に階子
 をバタ／＼りて行く。葉「若い人は羨ましい。瀧「もう一度あの位になッたら

好からう。葉」と云つて、本當に面白いも可笑いも知らない昔になるも詰まら
 ず、然うね、二十三四で遊んでるたいが。瀧「時に今の干菓子は何うなんだ、
 丁度其の二十四五なんださうだが、工合は好いのか。葉「男爵でも可なりださ
 うで、先ア／＼無事平穩と云ふ處でせう。瀧「何時だッけ君葉先生、宅は宇多
 源氏の嫡流羽林家で何うとやらッて、大いに脅してゐたッけが。葉「何方も
 一寸美いから、琴浦の家でも評判らしいの。瀧「フム。葉「あなたも彼のく
 らるのを一人拵へたら何う、可愛くッて好いでせうよ。ト云ふ顔を見ながら。
 瀧「本氣でそれを云ふ程、お前が捌けてゐると、わたしも餘つ程若くなれるん
 だがな。葉「變な事を言出しましたね。ト眞顔になれば笑ひに紛らし。瀧「五年
 間堅法華でゐるんだもの、偶には其のくらののお慈悲のお詞はあッて然るべ
 きだ。葉「然うですかねエ。瀧「然うだとも。葉「わたしが斯様に惚てゐても。
 瀧「可愛い亭主なら尙更の事だ、少しは浮世の義理と云ふものがある。葉「義

理で亭主を貸す人があるでせうか。瀧「商賣人にも似合はない。葉「素人と違つて、斯うすりや斯様と穴を知つてゐるだけ氣が揉めますさ、わたし忌ですな、そんな浮世の義理なんぞ。瀧「だって、家のは根つから構はないぜ。ト云はれてお葉は肩を結びしが、眼を二つ三つ数隣き。葉「あなた、姉さんは幾ら苦勞をしても、日がな毎日一つ家にゐられる體ぢやありませんか、あなたが邪慳にするぢやアなし、阿父さんは氣の通つた善い仁だし、十日に一遍あなたが明けて見た處で、何う心配の爲やうがあるでせう、それにあなた、此頃家なんぞ明けた事はありますまい。瀧「知れた事さ。葉「それとも有るの。瀧「無いと云つてから、有るかツて聞く奴があるかエ。葉「あなた。瀧「何んだエ。葉「若いのが欲くなりましたね。瀧「お株を始めたぜ。葉「お株ぢやありませんよ、エ、あなた、何か拵へましたね、然うでせう。瀧「来い、早々御免蒙らう、そんな景氣なら、朝つばらから不自由つたらしく、爰へノコノコ来るもんか。

葉「ですけれどさ、愚痴を云つたり、遠廻しに妬かせまいとしたりお爲なさるから。瀧「誰がそんな事を云つたエ。葉「何でも好在んす、わたしが精出して姉さんと二人分妬いて上げますから。瀧「妬くほど亭主持てもせずだ、些と寄席へでもお供しませうか。葉「あなたは持てるから駄目ですよ。瀧「然う云つて下さるのはあなたばかりだ。葉「何處へ行つても持てないやうな瀧野さんなら、わたしも初めツから苦勞はしませんさ、斯様な者でも、土地で何んとか云はれてゐるんですの、満更なねエ。瀧「解かつたく、賣れるよ賣れるよ、引く手数多で恐入つてゐるんだ、何卒手一杯にお妬き下さい。葉「そんなに反失さなくツても好在んすよ。瀧「糞やかましい婆アだな。葉「姉さんの事でもわたしの事でも、何んて云ふた婆アだ婆アだツて、あなたも早く爺イにおなんなさい、何時まで若がつてゐるんです。瀧「若がりやしませんよ。葉「本當に若いから尙駄目だ。瀧「何んだエ、初めは大層意氣な人だツたが、後では元の

木阿彌だ。葉「又愚痴を云ふの、そんなに浮氣がしたいのなら爲さいな、だけど爲るなら立派なのにして下さいよ、あなたも此の土地や日本橋では、可なり色師で賣つた仁だから、爲るんなら歴とした姐さんをして下さいよ。瀧「フ、太く婆アさんばかり押付けたがるな、自分が齡を取ると、若いのが羨ましいと見えるね。葉「小便臭いのと一緒にされちやア、仲間へ顔が出せませんからね。ト煙草に紛らす苦笑、ボンと敲いて。葉「あなた若いのが出来るますね。瀧「煩えな、又始めた。葉「イ、エ紛かしてもいけません、わたしが文句を云ふのが煩いもんだから、言質を取つて置いてから、忌應なしに押つ伏せやうと思つて、コリヤ些と撚りが戻りましたナだ。ト一服詰めて煙草盆の火をせよる。瀧「人の肚裡を見透かしたやうなお小言だね。葉「見透かされたんでせう。瀧「然うく、此頃若いのが五六人ある。葉「一人は確にあるでせう、あの兒は歌澤が巧う御座いますね。ト云はれて瀧野は何とやり、窮屈さうに居

住ひを直し。瀧「何か手前勘で、鬱陶しい事だ、お前も實に根氣が好い。葉「女は妬くのが商賣です。瀧「へエく。葉「あなた、わたしはあなたの様な悪黨を、五年も斯うして取留めてゐるのを味噌にしてゐるんですよ、お榮さんにも確りお爲よくと云はれながら、それでも彼の口の悪い人に褒められてゐるのは何故でせう、ねエ、爲るとなつたら爲すに置かないあなただから、爲ても好いから得心づくにして下さい、本當に魔が魅したんだ。ト涙聲。瀧「馬鹿、好い加減にしろ、そんな料簡なら貴様一人を四年も五年も守つちやらない。葉「一年増しに色氣も艶も脱けますからね。瀧「首や姿の談ちやあるまい。葉「と云つて素人をお欺しよつて事御存じ。瀧「又お株を云つてゐるやがらア。葉「お株は其方の事でせう、好在んす、お榮さんに話して、何方が悪いか聞いて貰ひますから。ト云ふ此のお榮とは、築地河岸に井筒と呼ぶ待合を出してゐる元は同じ新橋の藝妓、親のある身は客擇みも儘ならず、深い馴染の瀧野

をお八重の手に渡して、自分は餘の人の世話になりての今の稼業、お葉とは一方ならぬ仲好しなり、瀧野は態と溜息して。瀧「先ア出掛けませう、着物の始末でもして親孝行をなさい。ト詰まらなさうに立上れば。葉「あなた怒つて歸るの。瀧「當然よ。葉「わたしの云つた事が、そんなに氣に障るの。瀧「何うだつて好いや。葉「好かアありません。ト羽織の襟先を掴む折柄、電話口へ出し君葉の聲、萩廼家と云つたはお葉が大切の客の宿坊。瀧「ソラ見ろ、自分の方は何うしたんだ。葉「斷りや好いでせう。ト云ふ處へ君葉の足音。瀧「解かツたく、飛んで参ります。ト怒鳴るやうに調子を低めて云へば。君「今時分随分ね。ト階子の下から引返し行く愛想の返事、お葉は黙つて瀧野の手をグイと曳く。

中 之 卷

日本橋は西河岸の貸席相生俱樂部に、今日夕涼より哥澤家元の大浚、眉毛の痕の青々と垢抜けのした年増達が、白の襟元緩やかに、丸帯ふツくらと彼方此方する状は、江戸の昔を今茲にしるぶの露に初秋の、風も静けき下廊下、女師匠の控室を少し離れし縁先に、釣燈籠の灯影を避けて、立話をしてゐるは、長谷川町の新道に松葉巴の提灯を、人に知られし哥澤芝美都の一人娘お袖、相手は彼の瀧野其一にて、四邊に人氣なきまよに、密々聲の睦まじさう。袖「あなたモウお歸んなさるの。瀧「君が忙いんなら、何時まで居たつて仕様がない。袖「お連れがおあんなさるんでせう。瀧「イ、エ、家元への義理旁、誰かの顔を見に。袖「方々の藝妓衆や何か、綺麗な仁が澤山居るでせう。ト今年十八のまだ仇氣ない處もあれど、流石に世馴れ人馴れし口氣物腰。瀧「藝妓

の顔を見に哥澤のお浚へ来る人があるもんですか、そんな者は店にりや幾らでも見られますア。袖「毎日見飽きてるらッしやるでせうね。瀧「彼様云やア斯う云ふで、何故そんなに苛めるの。袖「だって、アノ、お葉姐さん何うなすつて。瀧「何だか此頃は惘然してゐます。袖「あなたが浮氣をなさるからでせう。ト色白の下膨れに一寸笑鑿、お袖が斯うお葉の事を知つてゐるは、自分達母子が豫々懇意にする箱崎の挿花の師匠長堀と云ふが、瀧野の小學校時代からの友達にて、何方も近しく此の家へ出入りする中に、何日か馴染となりたるゆゑにて、然れば互の身の上も大方互に知つてゐるなり。瀧「お袖さん。袖「エ。瀧「長堀から何も聞かなくつて。袖「何を。ト云へど紅くなる。瀧「何をツて。トこれも暫らくは黙然、二階にては唄の切れ目か賑やかな拍手の響き。袖「哥澤を聴くにも拍手喝采が要るんだから、大變ですわね。瀧「惣髪銀杏返に結ぶあなたとツて、自動車で歩くでせう。袖「そんな偉いものへ乗つた事なんか。

瀧「有るの、無いの。袖「無いわ。ト少し甘え氣味、瀧野が異う云ひたるは、本町の藥品問屋西山の息子清三郎と云ふが、芝美都を手狎けて、娘を折々自動車などにて彼方此方と連れ歩くを知つての擲擲。瀧「今夜は來てゐないんですか。袖「あらずしやるわ、爰に。ト密と瀧野の手の甲を弾く。袖「お門が違ふでせう、手前共にも舶來物は澤山ありますが、魔睡劑はありませんでした。袖「何んとも仰有い。ト睨む眞似して。袖「あなたこそ長堀さんに、何んにもお聞きなさらなくつて。瀧「何をです。袖「何をツて、あなたとツて仰有るぢやありませんか。瀧「困つたな。袖「何うせお困りでせう、階上へ行つて聴いて入らッしやい、芝土志さんが演つてゐますわ。瀧「フム。ト思はず耳は側ても能くは聴こえず。袖「お前さんは唄を聴いてゐるんですね。袖「アラ然うぢやありませんけど、外の仁に彼の聲はありませんもの。ト云ふに瀧野も好きな道、柱に凭りて蹲み込む、上には唄の切れぐに。哥澤「果敢き戀のやるせなや、

ほんに浮世は儘ならぬ。お袖は四邊を見廻して、瀧野の顔に顔差寄せ。袖あなた本當に長堀さん處で何んにもお聞きなさらなくッて。瀧「わたしの云つた事も聞きましたか。袖」エ、。ト顔を上げて了ふ立ち身のお袖。瀧「阿母さんがなア。ト云ふ折横手の座敷より女の聲。女「お袖ちやん、お袖ちやん。ト呼ぶ方を見れば、若い師匠の小手招き。袖「芝波都さんが呼んでるますから、又後でね。ト小走りに行く後姿、中肉ながら引締まりて、キリ、としたる婀娜娘、見送りつゝも廊下を表へ、五歩六歩の瀧野の前、着附も帯も黒づくめ、齡は四十を越してゐるれど、デツブリとせし大年増、袷の胸の下前を腋の方へ引張りながら、オヤと聲を掛けたは芝美都。芝「よく先ア入らッしやいましたね、其室でお茶でも召上がれな。瀧「有難う。芝「何んだかまだお暑いちや御座いませんか。ト愛想を云つて行き過ぎる、瀧野は何やら手持なく、帳場の隣りの休憩所にて一休みと立寄れば、食卓の前横に肩擦合はして紋付同志、男は綾

小路文學士、女は鶴松葉の君葉にて。君「あなた、居らしつたの。ト目早に看付けて元氣な聲、男の方も見知り越し。綾「瀧野さんですか、此方へ入らッしやい。瀧「これはお揃ひで。ト後へも戻れず、端近くの食卓の側に坐つて煙草一服。綾「君はお一人ですか。瀧「意氣地はないんです。綾「何うですか、此者から毎度お噂は伺つてゐます。瀧「わたくしこそ君葉君から伺ひ通しです。君「瀧野さん、今夜は確にお一人ね、姐さんが然言つてゐてよ、必と行つてゐるッて。瀧「何故でせう、君「駄目よ、今日のお夜にあの人のゐない筈がないぢやありませんか。瀧「然うですか。君「何が然うですかです、散々突當りの縁側の處で、ねエあなた。綾「苛められますな。瀧「逢ひに行く邪魔をした覚えもないんです。綾「何うです、染々お話をした事もないから、何處か其の邊へお附合ひ下さらんか。君「御一緒に入らッしやいな。綾「云はど君は僕のお主筋だ。瀧「何うもお返事に差支へますな。ト好い加減に逃けてゐる、處へ誰やら呼びに来る。

綾「如何です瀧野君、友達と一杯飲りに行かうと云ふのですが。瀧「有難う、折角ですが。綾「然うですか、ぢや残念ですが。瀧「失禮を致しました。君「瀧野さん、下郎は口の善悪なき者よ、好くツて。ト座敷衣の端折を直して、會釋匆匆、君葉は男の手に縋るやうにして出でよ行く、連れと云ふのも同く一組、酒の機嫌か燃れつ纏れつ。

此時二つ目の唄切れて、床は次の師匠と代り、客席樂屋の模様種々あれど、くだくしければ總て省きつ。

瀧野は温茶一杯、頬杖ついてゐる處へ、密と來て後から、お袖が黙つて差覗く。瀧「何うしたの。袖「悪かつた。ト首を傾けて甘えた風。瀧「阿母さんに逢ひましたよ。袖「好いぢやないの、エ、其處へ行つちやお邪魔。瀧「これから鼠に引かれる處。袖「島田か丸鬚に結つた鼠でせう。ト云ふなり入つて障子を締める。瀧「明けて置いたツて好いぢやありませんか。袖「締めたツて好いわ。瀧「何

んだか變だ。袖「御迷惑。瀧「お前さんが困るでせう。袖「何うでも好いわよ。瀧「ホウ、強いな。袖「だツて。瀧「阿母さんに何んか云はれたでせう、エ。袖「自分だツて、他人の事の云へた義理ぢやない癖に。瀧「大層威張りますね。袖「實は意氣地はないのね。瀧「饒舌つてゐて好いの。袖「大丈夫、今上がツて淀を演つてゐますわ、それから尙一つ何か弾くんでせう。瀧「下りると逃けて行くんですね。袖「ねエ瀧野さん。瀧「エ、袖「先刻の雨の降る夜をお聴きなすツたでせう。ト云ふは心の謎々と、察して瀧野は嬉さに、初心らしくも此と胸騒ぎ、されど浮世は儘ならぬ思ひの種が愚痴となり。瀧「聴いたでもなし、聴かぬでもなしですか、モウ蒔蕪問答は止しませう。ト爲う事なしの笑顔をお袖は側に突膝しながら熟と視て。袖「あなた六白、七赤、エ。ト五歳六歳若く訊かれて。瀧「何んだか知りませんが、今に四十です。袖「眞逆、本當にお幾つ。瀧「星が好ければ養子にしてくれますか。袖「エ、奥さんもお葉さんも皆な

一緒に。ト云ふは一時の戯れながら、色も戀も残りなく此の一言に打破られし心地して。瀧「あなたなんぞは、何様な若い美しい御亭主でも有てますね、エ、お嫁に行くの、お婿さんをお貰ひなさるの。袖何うなるんですか、自分で縦令何う思つた處で。瀧「阿母さん次第ですか。ト話は少し沈みし折から、障子細目に芝波都の小聲。波「お袖ちゃん、一寸。ト云ふにお袖が出て見れば、波「山さんが、表へ自動車で来て待つてゐらッしやるわ。ト然うありさうな話に太息。袖「一人なの。波「エ、今運轉手がわたしを呼びに来たから、表まで行つて見ましたらね、向ふの河岸の暗い處に自動車があつて、山さんがお一人なの。袖「あたしだけに來いッて云ふの。波「阿母さんもお前もお出でッて仰有るけど。ト紙包取出だし。波「これは今夜の義理ですッて、阿母さんに頼んで家元へ遣つてくれッて。ト見せるを見れば、横に西山、裏に十字の字。袖「仕様がないわねエ、これは帳場へ出して頂戴な。波「だッて、お師匠さんが下り

てお出でなさらなけりやア。ト話の中に二階の動搖めき、瀧野は立つて廊下へ出で。瀧「又其中。ト衝と玄關の方へ行くを。袖「アラ、一寸。ト追はんとする袂を引いて。波「表から見えますよ。袖「好いわよ。波「好かアありません。ト止むる隙に、履物引掛けて立出る瀧野、外より恰ど入來るお榮。榮「瀧野さん、歸るの。ト突然に云はれて慌て氣味。瀧「今來て何うするんだ。ト立止まれば。榮「お前さんこそ何うしたの、エ、一寸、彼處に師匠らしいのと新造が此方を見てゐるよ。瀧「然うか。榮「教へて上げたら見るもんですよ。瀧「何を云つてゐるんだ、戸外で。榮「何でも好いよ、お前さん家へ歸るの。瀧「ウム。榮「ぢやア待つておいでなさい、帳場だけでわたしやア歸るから。瀧「一緒に歸らうッて云ふのか。榮「當然さ、昔は嬉がッて一緒に歩いた癖に。瀧「大きな聲をするなよ。榮「待つておいでなさいよ。ト入つて行くお榮、齡は瀧野と同年の三十六、瘦形にて色淺黒く老けたれど、髪と頸足美しく、姿も流石すつきりと、

初武藏のお近とて元は新橋に鳴らせし女の、今も何處やら残る艶、油氣見えぬ丸髷も風情あり、瀧野は表掛りの電燈の灯を避けて、自動車の背後の闇を徘徊しながら、お榮の來るを待つ間に、芝波都に送られて出で來しお袖、後から續いて今のお榮。榮「サア行きませう。ト見廻す闇に光を放つて飛ぶ自動車。瀧」何をしてゐたんだ、遅いぢやないか。ト歩き出せば。榮「鶴松葉のお婆アさんの出先へ電話を掛けたの、今夜はわたしの處で親族會議を開いて、一粒選の年増が取巻いて御機嫌を取つて上げやうと思つて、ね、何ならお宅のお八重さんも呼びませう。瀧」お前の家へ行くのか。榮「羨ましけりや自動車を呼んで上げるよ。瀧」何を云やアがる。榮「其の江戸つ兒が出るやうなら、お前さんも戀煩はしますまい、電車で行かうか、エ、斯様な婆アさん爺イさんなら、手を引かれて乗つたつて、誰も何んとも云やアしまい。瀧」色情狂と思ふだらう。榮「憚り様だね、ぢやア先ア腕車を奢らうよ。ト辻待の車夫を願で呼

んで。榮「築地河岸。

下　之　卷

何ぞ所思のあるかして、古い馴染の瀧野を我が家へ連れ戻りたる井筒の女主人、門口の植込越しに河岸を見下す表二階に陣取りて、自分も客の大元氣、茶は取り措いて直ぐ酒の、一陶も何うやら軽くなりし時、女中お重の案内にて入來るお葉。榮「よく早く來られたね、旦那様お待ち兼だ。ト蒲團を直せば。葉「有難う。ト落着いて。葉「處で一杯戴きませうか。榮「何だね此の藝妓は、行儀の悪い、お客様に御挨拶でもなさい。葉「ハイ、あなた好うこそ。ト三つ指、酒肴を運び來しお重は見て笑つて行く。瀧」何う爲やうつて云ふんだ。榮「御機

嫌を取るのさ、席料も玉祝儀も一切なしで、本當に色男だね。瀧馬鹿。榮「まだ書生つ坊時分の癖が治らないんだよ、此の人は、そんな毒々しい口を利くと、今時の若い女は怖がるよ。葉「先ア仲裁ながらお酌しませう。ト瀧野に酌けば、お榮がお葉に酌いでやる。葉「あなた、今夜甚い處を捕まりましたね、折角のお楽しみ中。瀧「何がお楽しみだ。ト流石に少し照れ加減。榮「何さ、そんなにお前さん持上げる事はないよ、全く妬く程亭主持てもせずでね、當込みの若いのは、自動車の旦那に攫はれの、色男鼻明きは役が悪かつたね、お葉姐さん確りして下さいよ、わたしが手掛けてるる時分にやア、こんな脆弱いんぢやなかつたがね。葉「何方が叱られてるるの。榮「罪は同罪さ、瀧野さん、お前さん彼の娘に惚れてるるの。ト露骨した尋ねやう。瀧「惚てるりや何うするの。榮「取持つて上げたいけど、あれなら先アお止しなさい。瀧「それは御深切様だ。榮「フ、何んだね、尖らかつて、本當に惚てるるの。葉「お友達の挿

花の師匠の家で屢々顔を見て、何時の間にか大熱々さ。榮「然う、若いし綺麗だし、一寸異な娘だけど、あれは本當にお止しなさいよ、と云つてわたしが徒妬をする譯もなし、ね、打撒けて云ふと、本町邊の藥屋の息子とかと出来てるて、家へも二度まで来た事があるから。葉「爰の家へ。榮「ア、けれども味と哥澤でね、女の方は惚ちやらないらしいのさ。葉「瀧野さんにや惚てるるんでせう。榮「其處は御同様覺えのある曲者だから、何んとか云はせもしたらうが、瀧野さん、お怒んなさんなよ。瀧「何を。榮「打撒け序に素葉抜いて了ふと、今爰へ来た女中ね、あのお重が家へ来る前に日本橋の紀伊國と云ふ待合へも、或會社の重役と来た事があるツて、初めて来た晩に直ぐ其の話さ、お前さん見た事があるのかエ。葉「芝居で一遍見掛けて、麗々と此方の御紹介さ。榮「瀧野さん、縦令賣物買物にした處で、錢つ子の交つてゐる情事はお止しなさいよ、お互に心意氣で色戀をやつて来た人間なんだから、ねエお婆ア

さん。葉「お婆アさんは舞臺に障るね、それでなくツたツて、婆アくで好い加減氣が怯けてる處を。榮「仕方がないやね、あの娘つ子なんぞと比べた日にやア、零だね、女がお前さん三十幾歳と來ると、眼の下も耳の下も弛んでね。葉「止して下さいよ女主、幾ら先輩のお詞でも、それでは餘りお捌きが片手落でせう、お前さんは良人と同年だから三十六、もう四十の方へ近いけれど、手前はまだ同字列ですよ、二十三になつてもう零と來ちやア、年増は何處で立行きます。榮「お葉姐さん、只今良人と仰有いましたのは何誰の事です、側にゐるのは他人様からの拜借物だよ。葉「だツてさ。榮「だツてぢやないよ、お前さん然う己惚てるから、餘計な苦勞が絶えないんだアね、若ガツてる人は若い人に任して、狎猫婆アは引込んでる事さ。葉「自分は他人だと思つて、馬鹿に斷念が好い。榮「然うぢやアないけど、所謂お前さん處の良人なる者だツてね、わたしに云はせりや、濟まないけどもう時代後れだよ、服装

を御覽な、お前さんやわたし達向きの道樂者好みで、先ア大略十年古いね。瀧「好い面の皮だ。ト辛の隙に口を出す。榮「黙つてゐらツしやい、今時は結城を態々お召に織つたのを着るのが通人なんだもの、あなたなんぞはもう賣れないよ、今日あたりの扮装を見たツて、頭の前から足の先まで、餘り辻褃が合ひ過ぎてゐるわね。葉「モシ先口、大事の情人なんだよ、今微とお手柔かに願ひたいね。榮「ギヤアく、妬く癖に、何んだエ。葉「夫婦喧嘩へ口出しはするもんぢやないさうだ。榮「喧嘩でも痴話でも何んでもするさ、瀧野さんだツてもう何年賣れるもんか、喰付くのも引搔くのも今の中だ、ねエ昔の亭主。葉「何んだエ、今引込んでゐると云つて置きながら。瀧「全く駄目だ。榮「落膽してるよ、サア温かいのを一杯召上がれ、奥方、ぢやアない、情人も一杯お上がり。葉「空腹の處へ、今の氣焔が中つたと見えて、馬鹿々々しく酔つちやつた。榮「お泊め申しませう、お八重婆アさんへはわたしが電話を掛けて、公然

に一晩借りる。葉「他人様の奥さんを婆アさんは酷いね。榮「好いやねエ、瀧野さん、あの時此方がもう少し何うかしてゐりやア、他手に渡す男ぢやアなかつたんだけど。葉「女主人、酔つたね。榮「先ア酔つた意さ、ね、モシ今の情人。葉「何御用。榮「お前さんが引受けた頃には、瀧野さんもお前さんも美かつたねエ、お前さんは勿論今だつて美いけど。葉「好い加減にお爲よ、馬鹿々々しい。榮「本當さ、スツとして、新橋村の住人にやア少し勿體ない、あなた、大事にお爲なさいよ、昔ものは仕込みが違ふから、手丈夫で保が好いよ。瀧「随分大切に取扱つてゐる意だがね。葉「評判ほどでもないんさ、二言目にやア婆ア婆アアツて、われ／＼が自得にでも皺くちやになつたやうに云ふんだから、女は實に詰まらない。榮「詰まつたつて詰まらなくつたつて、今更始まらない穿鑿だアね、何アにお前さん、女あつての殿方さ、彼の新しい芝居へ行つて御覽な、頭垢だらけな髪を長くして、捲れ／＼の腐つたやうな袴を穿いてさ、

十錢未滿の珈琲に暮口を逆さにする輩でも、女優の惣見の切符は買つて來るぢやないか。葉「それでもあれが學者ださうだね。榮「然うだらう、あれで學者でよもなかつたら唯の芥だね。絨緞の上になんぞ迷誤々々してゐると、舶來の塵取の中へ吸込まれて了ふ代物だ。瀧「オイ、お話は御盛んだが、此方は一體何うなるんだエ。ト瀧野は何うやら中つ腹。葉「悪かつたわね、些と彼の話でもしませう、と云つても打壞しの後ぢやア。榮「殿様御不機嫌ですか、然しね瀧野さん、わたしやア眞劍に云ひますがね、あなたなんざア、瀧アさんだの其イさんだのと、今の若い人達に云はれるにやア、些と向が違つて出來てゐるんだから、卑い料簡はお出しなさんなよ、年齢が違へば花柳界での育ち方も違ふ、家へ來るお客を見たつて、わたし達が出てゐた時分とは、悉皆氣風が變つてゐます、日本橋の眞ん中の會席で、風呂番の祝儀を勘定書へ書いて出す世の中なんだから、若い娘なんぞを追廻して、一廉技倆で何うの斯う

のなんて、そんな古風な所爲はお止しなさい、昔の通人今の野暮、あなた程の人でも飛んだ馬鹿を見て、要でもない修羅を燃やす種になるから。ト誠心見ゆる詞の端。瀧「解かつた、人になんない事は爲ない事だ。ト打領く。榮「人も柄もあつた話ぢやない、有つて好いのはお財ばかりさ。ト干した盃を献せばお葉が酌ぐ。榮「何んだか陰氣になつたね。葉「お前さんのお講釋が終つたから。榮「あなた堪忍お爲なさいよ、こんな時に浮立でもしなけりやア、平生は随分詰まらない體さ。葉「初めのツ限り後釜もなしなんだね。榮「ありもしず、あつた處で、錢金の世話になる男が何んで樂みになるもんかね、わたしやア此の三年ばかり全然男さ。葉「然うだつてね。瀧「可惜年増をだ。榮「お擲られなさんな。ト云ひ捨てにボン／＼と手を鳴らす。葉「それを押さうよ。榮「手の方が景氣が好いやね。ト又二つ三つ、ハイとお重が上がつて来る。榮「三味線を持つておいでな、撥も。葉「大變な景氣だね。重「女主人がお珍しい。ト下りて行

きしが、直ぐ持つて来て置いて行く。榮「何を弾かう、偶に演ると手が顫へる、肩が張る、意氣地はないや。葉「久し振で伺ひませう。榮「瀧野さん、コラ昔の亭主、寢て了つちや不可ね、サア、起きて何かお演んなさい。葉「へエ、隠藝があるの。榮「幾ら仕込まうとしても厭がつて、到頭物にならずじま、お前さん仕込んだかエ。葉「イ、エ、本宅のも何も仕込まなかつたらしい。榮「尤もお客の藝人なのは扱ひ好いけど、藝のあるのは情人にやア糞だね。ト引寄せし三味線を離し。榮「中てられましたかエ。葉「何うしたの。瀧「飲んで食つて饒舌りつけられて、へト／＼だ。榮「可哀想に。ト手を鳴らしてお重を呼び。榮「頼んで置いたものは好いの。ト訊けば黙つて領く。榮「サア瀧野さん、お起きなさい、ベコ／＼三味線はお止めにして、これから水神へ行きませう。葉「女主人、何うしたの。榮「今夜は任して置いて頂戴、ヨウ瀧野さん、サア確りして、自動車来てゐるの。瀧「エツ、今音のしたのは此方のか。榮「サア／＼一緒に立

つたりく。葉「何う云ふ趣向なの。榮」黙つて下へ、サア。ト瀧野の手を取つて門へ出で、お葉と二人右左。榮「水神ですよ、電話も掛けてありますから。ト運轉手に聲を掛くれば、助手が心得て戸を引明くる、其處へ瀧野を押し入れるなり戸をピツシヤリ、内には若い藝妓が一人。榮「あなたも道樂者だらう、黙つておいでなさい。ト云ひつゝもソレと合圖の眼顔。瀧「悪戯をするなよ。ト瀧野の聲は早五六間、行き過ぎる後より。榮「それが肖てるんですよ、何卒御緩り。ト聞いてお葉が。葉「悪い洒落だね。ト見送る彼方の灯影は白く走り行く。榮「一晩借りたよ、餘り苛めて可哀想だから。葉「それで此方は何うなるの。榮「愚痴をお云ひでない、お前さんと二人並んで寝るのさ。ト引返す時、隣りも同じ稼業の家の窓の下、假聲使が源之助の切られお富。こわいろ、總身の疵に、色戀も、薩陲峠の崖の縁。葉「エ、冷い風だねエ。

作者白、此の花紫の中に出る人物の談、主に東京語を寫したれど、「何う

したエ」と云ふべきを、「何うしたイ」とは記さず、「云つてゐる」を「云つてゐる」とは書かず、書かねばとて、東京語の使へる人が讀む時は、自然に訛りて讀めるゆゑなり。

後編 紫 初時雨

第壹 芝居之卷

師走の風は餘所を吹く木挽町の芝居の賑はひ、評判は二番目の梅曆辰巳園、
 今尾花屋の場が開いて、看客一同米八仇吉の折衝に興がる折しも、東棧敷の
 六の戸を細目に一寸明け掛けしは、長谷川町の新道に住む哥澤の師匠芝美都
 の一人娘お袖、内から隙間を振返つて覗くなり直ぐ廊下へ出しは、采女町の
 洋酒食料品問屋の若主人瀧野其一とて互に一料簡ある懇意仲、閉てし板戸に

身を寄せし男は懐手。瀧「今日あなたの方の見物とは些とも知りませんでし
 たよ、大分大勢ですね。袖「幾らも出来ませんの、年末だもんですからね。瀧「こ
 んな事なら、連中へ入れて貰つて来れば好かつた。袖「巧く仰有い、長堀さん
 へ遊びに来てゐらゝしやる時だつて、あたしが行合はせると、澄まアして歸
 つておしまひなさるぢやありませんか。瀧「嘘をお吐きなさい。袖「本當ですわ
 よ。瀧「ぢやア何時澄まして歸りました。袖「先月の十五日に、ね、チャンと覺
 えてゐますわ。瀧「自分が水天宮様へ行つた序に寄つたから、思出し好いんで
 せう。袖「澄ましてお歸んなすつた方は何うなの。瀧「何澄ましてゐるもんです
 か。袖「イ、エ居らしつてよ。瀧「本町さんへ悪いからでせう。ト云ふは、お袖
 の馴染の客本町の薬品問屋西山の息子清三郎との仲を、覺つてゐての擲揄
 なり。袖「もう西の字の事堪忍して頂戴よ、ね、譯は長堀さんにお聞きなすつ
 たでせう。瀧「エ、あなたが阿母さんを説付けては、無理無體に逢つてゐる

んだって。袖「然う、そのくらゐ知つてゐらッしやりや好いわ。瀧「隠しても仕方がないからですか。袖「全然反對だからですよ。ト睨む爲、世馴れてゐてもまだ十八の可愛らし。

哥澤「神垣に植ゑし園女の山櫻、變らぬ花に古を、思へば八重の咲く頃は瀧「唄が始まつたやうですね。袖「ね、あなた。瀧「エ。袖「相生俱樂部のお渡の時も、芝士志さんのを聴きながら、ね。ト莞爾。瀧「もう先々月になりますね。袖「あの時こそ何様な事をしてゑと思つたのに。瀧「念が徹つて、自動車で迎ひに来たから好いちやありませんか。袖「それが口惜いのよ。瀧「段々偉くなりますね。ト少しばかりは冷かし氣味。袖「何んて云はれても仕方ありませんわね。瀧「何を云つたでせう。袖「皆なあたしが悪いんですから。ト露聲。瀧「何うしたの、エ、お袖さん、口惜いのは此方ですよ。ト顔差覗けば、袖のまよなる兩の手を、突然に男の胸に當てよ、お袖は遺瀨無氣なる眼に見上げ。袖「あ

の方は此頃もう自然に遠かつて了りましたの、ね、あなた、長堀さんに仰有つたッて事、若お忘れなさらなけりやア。瀧「エ、袖「愛想が盡きて了りました。袖「そんな事。袖「本當、エ、必定。ト云へば領く瀧野、お袖は今更羞んだやうな笑顔を俯向ける。瀧「今日は大變大人しい島田に結つたんですね。ト見下す顔へ前髪の障るばかりに差寄つて。袖「あなた島田お嫌ひですツてね。瀧「イ、エ。袖「聞きましたわ、あなたが來てゐらッしやると思や、银杏返に結つて來たんですね。ト云ふ半分は口の中、階段の足音に瀧野が思はず見返れば、茶屋の男がチラリと一目、氣にもせず正面の廊下を西の方へ行く。瀧「場所の方は好いの。袖「阿母さんが居ないんですね。瀧「風邪ですツて。袖「死んで了へば好いわ。瀧「馬鹿な事を。袖「そりやア嘘ですけど、懊惱つたいわ。瀧「何うしたの、今夜は。袖「先刻お話ししてから、何うか爲了つたわ。瀧「そんな事を云ふと、今度は此方が何うかしますよ。ト右の足の爪先にて、お袖

の左の足の先を踏む。

哥澤「芽出し紅葉の色に出で、浮名の立ちしをか惚に、思ひ佃の送り舟唄の切れ目の色模様にか、場内は動搖めく人聲拍手の音袖」あんなになつたら男も女も何うなるんでせう。瀧「何うなるもんですか、お互に實意さへありやア。袖」然うか知ら。ト甘えた口氣。瀧「蛇の生殺し見たいな事はッかり云つてゐないで、彼方へ行つて見たら好いでせう。袖」然うね、幾らお店へお出入りの方ばかりでも、悪いわね、奥さんへでも知れると。瀧「お前さんに芝居を御覽なさいッて云ふの。袖」見たくないの。瀧「それぢやアお聴きなさいな、その爲の哥澤の總見でせう。袖」もう澤山、見てゐる心も聞いてゐる心もないわ、丁度向ふの下棧敷と爰と、眞つ正面なんですもの。瀧「だからわたしも、芝居は直に見やしない。ト懐手の右を出して、袖口ぐるみお袖の左の手を掴めば。袖」嘘を仰有い。ト嬉さう。瀧「見たくも聞きたくもない人なら、何時まで

も爰へ置いて置きますよ。袖「エ、瀧」外の人は何處へ行つたと思つてゐるだらう。袖「芝波都さんが知つてゐますわ。瀧」大丈夫。袖「平氣。瀧」お目附役ぢやないの。袖「それは確、あなたの事も西の字の事も、悉皆あたしに同情してゐてくれるのよ。瀧」西の字に一番同情してゐるんでせう。袖「又。ト云ひしが惘惘と。袖」折角久し振で嬉しいと思つたら、もう少しでお別れするのね。瀧「本町次第で、又何うにでもならうぢやありませんか。袖」本當にあれば堪忍して。瀧「ウム。ト頷きながらも硝子障子越しに戸外を覗き。瀧」降つて来たんだな、道理で悪く寒いと思つた。ト云へばお袖も振り返り、電燈の灯に白き闇の雨の、ハラ／＼と庭の常磐樹に掛かるを見て。袖「瀧野さん、淋いわ。瀧」その中に一日何うかして緩り逢ひたいね。袖「あの方がもう遠退いたから、長堀さんのお宅へ行くッても云へば、些とぐらゐ何うかなりますわ。瀧」公然一日借りやう、だが、貸すまいな。袖「もう好い筈なんですけど。瀧」當人が先づ怪いて。

ト云ふ口の下、お袖は不意と瀧野の左の袖口から手を差入れ、二の腕のあたりを抓る、瀧野は其の手首を攫んで。瀧「冷いな、サア彼方へ行つてお灸り。袖」ぢやア此の次の幕が開いたら又。瀧「ウム。袖」お連れの方に變ぢやない。瀧「變だつて仕方がない。袖」ぢや悪いわね。瀧「關うもんか。袖」然う。ト漸う離れながら。袖「硝子障子がガタ／＼云つて、何んだか心細い事ね。瀧」今夜何處かへ連れて行つて了はうか。袖「エツ、本當。ト復取付くを徐と押退け。瀧」後が大變、ね、お互に辛抱しませう。袖「然うね。ト夢より覺めたる氣色、本意無さように。袖」ぢやア又後程。ト思ひ切つて行きつゝも二度三度振返るを、見送り果てし瀧野の顔の近々しさ、場内にはドツと湧立つ褒聲。

哥澤「更けて一聲不如歸、あれと云ふ間も明け近く、八幡鐘の後朝に、別かれて後の物思ひ

場所に坐つて見る眞向ふ、西の下棧敷の六の前列に今押出されてゐるお袖と、

瀧野は遠く眼を見合はせる。

第貳 料理屋之卷

土地で有名な旨い物屋金春の杉月の奥の下座敷、客は瀧野、側に大人しく坐つてゐるは、吾妻家の總子とて明ければ十六になる綺麗な半玉。總「あなた今夜よく召上がるのね。瀧」お酌の仕手が好いから。總「太郎姐さんが遅いんで、自棄酒なんでせう。瀧」お前ぢやアあるまいし。總「アラ、あたしが何時お酒なんぞ。瀧」だつて、徒惚を連れて来てくれなかつたつて、其人の友達のお座敷で、暴飲をして大變だつたつて云ふぢやないか。總「何時、嘘よ、誰が其様な事云つて。瀧」確な人が然言つた。總「お酒を洋盃で飲む爲したどけよ、それだ

のに暴飲だつて、随分だわね。瀧「でも、逢へないんで懊惱つたがッたのは本當だらう。總「それも嘘、誰からお聞きなすつて、太郎姐さんにでせう、寢物語に、御馳走様。ト丁寧に辭儀をする。瀧「偉い事を云ひますな、そんな可愛らしい、牛も殺さないやうな顔をしてるて。總「何を殺さないんですつて。瀧「蟲。總「覺えてるらッしやい。ト膝のあたりを抓る爲をする。瀧「何處の人が斯様な綺麗なのに可愛がッて貰うんだらう。總「抓られると不可いもんだから、お世辭を使つて。ト云ひながらも酌をする。瀧「冷たさうな手をしてるね、お炙りな、ト火鉢を二人の間に出せば。總「澤山。瀧「先ア然う仰有らないで。總「其様に火鉢で仕切をなさらないだつて、大丈夫よ。瀧「これで藝妓にでもなッたらな。ト溜息をして見れば。總「本當に末が思ひやられるわ。瀧「食はせ者め。ト拳固で微と帯の結目の上を打つと、總子は可愛らしい顔をして笑つてるる、處へ温酒を持つた女中が先に立ち、此の新橋での大姐和

歌本のお島が入つて来る、四人の應酬一通りよろしくあつて、女中は馳て火鉢を一個別に持つて来て、お島の側に置いて行くを、後の方へ退けながら。島「今夜は珍しく召上がッてるらッしやいますのね。瀧「寒い處から来て此の締切つた座敷で、無闇と物凄いの飲ませられたもんですから。島「ホ、物凄う御座いますか。瀧「流石は御一門だけの事はあつて、ねエ總ウちやん。總「だつてね、姐さん、あたしの事を牛も殺さない顔をしてるッて。島「蟲でせう。瀧「そら御覽な。總「駄目よ、大きい人は大きい人の肩を持つんですもの。ト羞んだやうな聲。瀧「これで皆なやられるんですな。總「何を。瀧「牛よりも人が死にますつて。總「然う。ト笑顔の口をキュツと結んで一寸横向き、お島は種々と話しの中に盃の献酬しながら。島「太郎さんは直に来るの。ト總子に尋ねる。總「一寸實家へ行つたんですつて、もう先刻電話で。島「然う、お前さんは御苦勞様。總「エ、ト頭を下げながら笑ひ出し。總「姐さんに御苦勞様つて云

はれて、エ、は可笑いわね。ト袂を口に當ててクツクと笑ふ。瀧「凄かッたり
 仇氣なかつたり、麒麟兒だね。總「首が長いから。瀧「仕様のない奴だなア。ト
 云へば今度はグラ〜笑ふ。島「長いと云へば、彼の妓は何うしたんでせう、
 總ウちやん、お前さんお氣の毒様ですがね、吾妻家へ電話を掛けて見て貰つ
 て下さいな。總「エ、ト遽に眞面目になり、瀧野の止めるを聞捨ててに帳場の
 方へ行く、偕此のお島と云ふは、太郎や總子達の抱主乙音と云へる姉株と同
 胞同様の仲好しにて、太郎が先頃築地の待合井筒から、瀧野と二人自動車に
 て向島へ行きしを初めに、其後も折々呼ばれてゐるを、よく知つてゐるゆゑ
 に、別段斯うも氣をつけるなり、お島は優容に酌をして。島「其後如何です。
 ト眼の愛嬌、齡は四十に近けれど、素顔の艶の落着きて、素樸なる中に云は
 れぬ色氣。瀧「相變らずです。ト笑へば。島「お宅のに知れない様になさいまし
 よ、御如才もないでせうが。瀧「處が何うも、初めが初めだもんですからね。

島「然うですツてね、井筒の女主人は何時も面白い方ですのねエ。瀧「變つ
 てるますから。島「だツてあなた、水神一條は唯事でないやうなお話ですが。
 瀧「然うでもないんです。島「でも當人があなたから、水神の晩にお隠しなさ
 らない處を伺つたとか云つて。瀧「困りましたね、何うも、面目次第もない。
 島「宜いぢやありませんか、お葉さんも得心づくなら。瀧「其處が其處で、好
 いとも悪いとも附かず、半信半疑なんですてね。島「先ア穩便にしてゐらッし
 やい、あなたゆゑには随分ねエ。瀧「擲擲つちや不可ません。島「本當ですよ、
 それだのに若いのに目を着けたりなんぞなすツて、何故然う殿方つて云ふ者
 は氣が多いんでせう、其處へ行くといわれ〜女は馬鹿な者で、男の仁は浮氣
 だと百も承知してゐながら、隠され〜ば打明けて得心づくにして貰ひたいし、
 打明けられ〜ば知らない昔が寧ろ氣が樂だと思つたり、本當に今度の世には、
 何様な事をして殿方に生れて來たいと思ひますわ。瀧「女は皆な其様な事を

云ひますがね、美しい女に生れて、野郎共を片つ端から手玉に取つて見たら、
 嚙面白からうとわれくの方では思ひますよ。島「駄目ですな、女が幾ら何う
 したつて、男に敵うもんですか、男を手玉に取る女だつて、グルツと廻りや
 ア尙且惚た一人の男に、泣かされたり笑はされたりして喜んでゐるんですも
 の。瀧「然う云ふ男の爪の垢でも煎じて飲みたいものですが。島「好在んすか。
 ト莞爾。島「その意でお一つ召上げれ。ト話の中、總子を先に以前の女中、
 太郎は直にと返事して、瀧野がお島に献す盃に、持つて來たのを酌いだ後、
 火鉢の火を見て出て行きながら、お島に目交ぜ。瀧「何卒お構ひなく、若いのが
 來るさうですから。島「一寸したお約束なんですのに、時間がまだ早う御座
 いますから、お邪魔になりますまで。瀧「然うですか。島「何卒お置き下さいま
 し。ト兩手を腿の外に軽く突いて頭を下ける、總子はおちよほ口をして。
 總「戸外は最早暗くなつて、寒い風ですわ。島「お灸んなさい。ト横の方の火

鉢を引寄せ。島「わたしも御免蒙つて。ト貰入を出して一二服、瀧野は大分酔
 つたらしく、横座の足を胡坐に組み直せば、押退けありし脇息を側へ總子が
 持つて行く、女中は此時「温い肴を又二種ばかり、それから切炭を持つて來
 て、二個の火鉢に繼ぐ處へ、姿を見せしは噂の人、總子と同じ吾妻家の抱妓
 太郎とて十七の若盛り、容色を云へば、彼の井筒家の女主お榮が、昔馴染な
 る瀧野の爲に、その徒惚お袖に肖たとて、洒落にもせよ、今の馴染の鶴松
 葉のお葉にも納得させ、態と取持ちたる程の肖方に、見る度瀧野は妙な心地、
 太郎は急いたる息使ひにて。太「遅くなつて済みません。ト先づお島に會釋す
 れば、お島はそれとも知らぬ氣に、太郎が瀧野に挨拶して後。島「お出でなさ
 い。ト初めて顔を見合はせての物優し。瀧「お前さんが餘り勿體をつけてゐる
 んで、お島さんが忙しい中を來て、繫いで来てくれたんだよ。太「マア済みま
 せん、今朝一寸實家へ行つて、髪を洗つたりなんかして、それから一二軒お

参りをして、歸り掛けに髪結さんへ寄つてゐたもんですから。瀧「髪を洗つたなア好いが、お参りを一二軒は可笑いな。太「然うですか知ら。ト片手に胸をコツ／＼と敲きながら莞爾してゐる。瀧「断けて来て。太「断けても来られないけど。トお島の方を見て。太「家が懸つか直ぐ其處でせう、腕車に乗るには近過ぎますしね、本當に氣ばかり急いで。ト帯の周圍など扱つてゐる、處へ女中がお島へ何やら。島「では我儘を申して濟みませんが。ト挨拶して。島「頼申しますよ。ト太郎總子にも首を傾けて笑顔の愛嬌。島「あなた、又何卒。ト口數利かず襖の外、太郎は瀧野の側に寄りて片手を膝に。太「此頃何うなすつたの、暫らく入らツしやいませんでしたわね。ト酌をする。瀧「何時も美しいね、エ、實家へ行つたなんて、誰の乳を飲んで来たんだか、オイ。ト膝の手を押へて揺振れば。太「昨日はお樂み。瀧「エ、何。太「梅曆は面白いわね、總ウちやん。總「アラ、此方昨日歌舞伎座へ行らしたの。太「エ、大勢さんと、

それからお一人と。瀧「お一人つて云ふなアわたしだらう、連れは大勢味方は一人。太「頼むあなたは二心だわ。瀧「總ウちやん、コリヤ／＼とでも云はないか。總「ぢやア、コリヤ／＼。ト笑ひ出す。瀧「お島さんが歸つたら、爺さんの方は寂れだ。ト云ふはお島の風采舉動、鍛へ込んだる其の味ひの身に染みては、今更ながら若い人の何やら彼やら物足りず、無端他事に出した愚痴。太「そんなに紛かさなくツたツて好在んすわ、お芝居のお歸りから何方へ行らして。瀧「誰に何を云はれて来たの。太「昨日行つてゐた人に最早チャアンと聞きましたの、あの方本當に、あたしと双兒のやうに酷肖てお在なさるツて。瀧「然うかね。太「大切の前の幕の明いてゐる時、其のあたしに肖た方と、あなたが食堂の方へ行らしたツて、悪いことは出来ませんわね。ト如何にも前夜の様子を能く知つてゐるらしきに。瀧「それがお樂み筋なら、お前さんは今夜呼ばないさ。太「本當、それならあたしで我慢して置いて頂戴、ね、井

筒の女主人さんや鶴松葉の姐さんに知れると悪いんでせうけれど、戯事の儘ちやア、ねエ瀧野さん。ト無理もなし、瀧野は昨夜、歌舞伎座の廊下やら食堂やらにてお袖と染々話し合ひ、心の奥も大方は知れて嬉かりしが、西山の手のキツバリと切れぬ間は母親の見張り厳く、此方の思ふやうにはならぬ懊惱つたさ、小雨降る夜の電車を、寄りつ離れつ門跡前まで歩きはしても、唯それ限りの氣休めにて、お袖が連れと一緒に乗つて行く電車を見送る初心の始末、われながら些と呆れもし、寧ろその事と今日は暮れるを待ちかねて、杉月にての今の遊び、道樂者の流石一度は年増の味の懐かしく、子供相手の亂れ心耻づかしとまで思ひはしたれど、太郎の言葉、酒の酔、煩惱でなく理窟でなく、任意よと再び元氣よく。瀧「オイ、お袖。太「ハイ。總「お二人振り御馳走様ね。ト總子の合の手。瀧「ナニ、知りもしない癖に。總「此の双兒事件を知らなけりや、新橋村の住人ぢやないわよ。瀧「姦い。太「處で何んなの。瀧「ブラ

ブラ出掛けやう、凄いのもお出で。總「何方、浅香さん。ト云ふは瀧野と太郎の遊び場、三十間堀の待合なり。瀧「何んでも好いから一緒ににお出で。總「お邪魔でせう。瀧「何う致しまして。總「實は拜見するのが辛いよ。瀧「それは相手に因るでせう。ト太郎の肩を揺りながらも、攫んで一寸力に立ち。瀧「若い人は依然綺麗だ。ト耳に口、太郎は其の手を擔ぐやうに押へながら。太「それこそお門が遠うでせう。

第参 素人家之卷

采女町の瀧野の住宅、五間々口の塗家に三階の袖藏、店の落間の突當りに煉瓦造りの二階建の倉庫二棟、帳場と云ひては上り口の片隅にホンの形ばかり

の無雑作な構へも、問屋としては却々に手堅さう、主人兼蔵今年六十幾歳なれど、鍛へ上げたる岩疊作り、骨身を惜まぬ店の用向、氣を弛ませぬ商の駆引、身代は年々に太るばかりの素つ堅氣にも、通つた處のある器用さ、倅其一には日本橋の吉野家のお八重と云ふ好き合つたのを持たせてやり、自分は十年以來の鰥暮らしに、時折の物見遊山、旨い物食ひ、毎晩の一陶、今夜は仲間誘はれて、氣の合つた同志が日本橋での忘年會の、留守を預かるは倅夫婦、奥二階の八疊の火鉢を中に、世間話の逸れ工合。八「他事ぢやありませんよ、あなたも此頃は何かしてらっしゃる。瀧」遊ぶつて云ふのか。八「珍しくもない、お遊びなさるなア好在んすけれども、好い加減にしてお置きなさらないと、上げも下げもならないやうな事が出来しますよ。瀧」お前とのやうにか。八「わたしは彼のお榮さんと張合になつて、本當にあなたにやア揉みくたにされて了つたんですけど、此頃は大分あなたが揉みくただから。

瀧「今更ねエ、己も最早來月は三十七だ。八「齡で道樂をするもんですか、子供瞞し見たいな。ト火の上に手を擦りながら笑つてゐる。瀧」ぢやア何が何うなんだ。八「何がッて、あなた、そりやアね、お榮さんも最早、初武藏のお近で新橋で鳴らしてゐた時分の佛はなし、鶴松葉のだつて、お榮さんと三歳違ひだと仰有つたから、一番若かつた處で三でせう、わたしも來年は五、皆な三十越したのばかりですから、若いのも欲いでせうけど、少しは考へ〜行つて下さいよ、後生ですから。ト火を弄つて苦勞らしい顔、瀧野は卷蕨を喫みながら。瀧」お互に時々此の齡の勘定をするんだがね、帳尻の合つた例なしだ、若いも年寄もあるもんか。八「何んですか其様な通なお話は解かりませんが。瀧」忌な事を云ふなエ。八「だつてさ、あなたにも似合はない、話が廻りツ贅くツて、卑怯ぢやありませんか。瀧」フ、ンとは何んだ。八「誰もフ、ンなんて云ふもんですか、テレ隠しはお止しなさいよ、わたしはあなたにお目に掛

かつて以来、そんな失禮な爲を唯の一遍でも致した覚えは御座いません。
 瀧「失禮もハツ禮もあるもんか、面白くも無え。ト苦笑、お八重は失笑し。
 八「失禮のハツ禮のツて、薪屋か米屋の爺さんの洒落ちやあるまいし、あなたも好い加減になさいよ。瀧「仕込み人がないからよ。八「此節の若い人は、何うしてわれく時代遅鈍とは違つて、なか／＼確りしてゐるんぢやありませんか。瀧「若い若いのツて、又彼奴の話か。八「彼奴つて、太郎とか云ふ妓の事ですか、眞逆ね、今更わたしがあなたの藝妓買の事なんぞ左や右云つたツて、それが何うなると思ふもんですか、今日まで、そんな事で嫉妬らしい事を云つた事が御座いますか。ト眞面目なり。瀧「それなら好いらやないか、お前なんぞは黙つておいで、叱責は親父が云つてくれらア。八「お叱責なんぞの出ないやうにと、それでわたしが申すんです、わたしが此方へ来た時に、阿父さんから種々優く。瀧「解かつたよ、そんな先祖代々の筋を並べるなア、芝

居でも今時は流行らないや。ト氣強き男の顔を熱と視て。八「木挽町の梅曆にも御座いませんでしたか。ト云ふは確にお袖の事と、これには瀧野も脛に疵。瀧「何んの事だ、それは。ト流石詰まつた一言。八「素人にお樂みが出来たんですツてね。瀧「又何か聞き嚙つたな。八「イ、エ、哥澤のお師匠さんの娘だツて事まで、チャンと知つて居りますの。瀧「フム、それが情人だツて云ふのか。八「あなたが情人に取られてゐらツしやるか、旦那様か、其處までは存じませんけど、何んでも美しい婀娜ッほい娘さんださうですね。瀧「誰が然言つた。八「誰も云やアしません、自然に知れますの。瀧「然うか。ト瀧野は片手を懐片手に火箸を攫んで灰に突挿し居丈高。瀧「それで、其の娘と己とが出来てゐたら何うなんだ。ト云ふ顔色、見て取るお八重も胸を据ゑ。八「然うでしたら止して下さい。瀧「何故だ。八「何故と云つて、藝妓買や娼妓買とは譯が違ひます、お師匠さんの娘なら、やツぱり藝人かは知りませんが、眞逆賣物買物ぢやアあります

まい、何んであらうと娘は娘でせう、そんな者に手を出して、あなたはそれを何うなさるの。瀧「ぢやア何うでも己が其の娘と、怪いと云ふんだな。八「怪いんぢやない、お立派なんでせう。ト皮肉、瀧野は疑ぐられ過ぎてのムシヤクシヤ腹。瀧「何う爲やうと餘計な世話だ、お前さんの手はお借り申さないよ。八「其様にまであなた其の娘が可愛いんですか。瀧「何も關係はないと云ふのに、それを有る事にして訊くからよ。八「あなたも男らしく仰有いな、そりやア深い事でもないでせうけれど、三度や五度逢はないツてがあるもんですか。ト少し弛むに、瀧野も幸と聲を和らけ。瀧「ぢやア云ふがね、其の娘は他の所有で、横合から馬鹿な爲は出来ないんだ。八「長堀さんで出来たんですか、意氣なお友達が、おあんなさるのね。瀧「何んでもないと云ふのに。八「だって、それまで仰有つたら、一寸斬られるも二寸斬られるも同じぢやありませんか、あなたも櫟つたい感をしないで、洒々と白状なさいな。瀧「何んでもないと云ふのに、隨

分貴様も執念いな。八「然うですか。ト眼を數瞬く。瀧「解かつたらそれで好いが、何んだツてお前は又お袖のことに限つて、然う貰くギヤア〜云ふんだ。八「お袖さんてお云ひなさるの、あなたの口からお袖と仰有る様ぢやアねエ。トお召の前掛で微と眼を拭く、瀧野はお八重が何や彼や大抵は知つてゐながら、お袖と云ふ名を今初耳の様子に訝く氣に懸かり。瀧「名前さへ知らないで、何を何處から聞いて来たんだか。八「わたくしは何時にも何處へだツて、一人で出た事は御座いませぬ、元が元だと云はれたくありませんから。ト泣出されては強くも云へず。瀧「それならそれで最早好いに爲やう、名を呼付にしままでを一々お吐責ぢやア、亭主野郎頭が上がりかない。ト捨臺辭。八「何もそんなに憎々しく云つて下さらないだツて。ト涙の眼を向け。八「ねエあなた、わたしには子供がありません、藝妓をした體の所爲でせうから、それは自分の罪で仕方もありませんが、子がない爲に、何ぞの時に。ト又ハラ〜。瀧「然うか、

己が他所へ拵へた子を引取りでもすると思つてか。八「イ、エ何處へお拵へなさらうと、何の道一人貰はないぢやア濟まないんでせうから、あなたの子なら喜んで引取りますけど、此方は一年増しに意氣地はなくなるし、あなたは何時までも氣が若いし。瀧ももう好い、哥澤事件も大抵解かつた、皆なお前の取越し苦勞だ、あの娘は今云ふ通り他の有だ、何があるもんか。ト云へば、お八重は泣止んで怨めしさうに。八「ぢやアこれは何んでせう。ト懐より出して見せたる一通の手紙、封筒の文字は見事に男のやうに書いたれど、隠し果せぬ優さの、裏に長谷川と記せしは、住む町の名を苗字めかせしお袖の筆と、瀧野は一日に悸とする其の口の前へ、中なる文を拔出して置き。八「案じるのが無理でせうか。ト又啜泣。瀧「貴様は己の名宛の手紙を開封したな。ト封筒の裏表見てから、一概に押擴けて讀む巻紙の文字の走書美く。ト母がおけい古を致してゐる間に一寸書きます

其後お寒さのお障りも入らつしやいませんか歌舞伎座でお目に掛かつてからと申すものあのおやさしいお詞がわすれず母におけいこをしてもらふ度唄の文句も身につまされてじれつたい事ばかりよろしくお察し被下度しかし遠からずあの方のかたも付きさう故それを樂みに致して居り升こないだの梅曆大ざらひの時の雨の降る夜を聞く度に思ひ出します其中何か替唄をこしらへて下さいまし一人で唄つて居度でございます木挽町の歸りに直ぐ電車へのりませんでしたのは込んでゐたからと云ふので誰もなんとも云ひませんでしたでしたがそれでも御いつしよに歩いたのを少しは悟つた人も御座いますそれは男の太夫さんです併し御心配は入りません母なぞに申す人では御座いません私に内々からかつた斗りです嬉さお察し下さいまし

其後まだ四日にしつきやなりませんがお懐しくつてたまりません二三日中

長堀さんへ伺ふ用が御座いますからあなたも何卒お出で下さいませめて
お顔を見ながらお話しでも、是非くく、其折には電話をかけます参れ
ば一時頃からです大抵あさつてのつもりです

母がおけいこの手をやめますからモウよし升おからだ御大切に

十二月十三日

その字々

戀しいくく

きの字様

御許に

一字残さず讀まれたかと思へば流石に面目なく、此の耻を見るも手紙の横取
よりと、瀧野は忽ちムラくと腹立ち聲。瀧「貴様には此の親展と云ふ字が讀
めないか。八」そりやア開封したのは悪う御座いませうけど、あなた、實はわ
たしの母が、歌舞伎座へ新橋の連中と一緒に、此の手紙の娘さんとあ

なたの事を聞いて来たので、何様な事かと思つてゐる中、見馴れない女の巧
い字で、日本橋の長谷川とばかりぢやありませんか、若やと思つて明けて見
ると是ですもの、あなたも腹がお立ちでせうが、讀んだわたしの身にもなッ
て見て下さい。トこれも一生懸命の顔の色。瀧「此の手紙は先方が勝手な事を
書いたのだ、己の手紙の返事と云ふぢやアなし、然し先アそんな事は何うで
も好い、女の處から手紙が来て悪ければ謝らう、貴様の罪は何うする意だ。
八」そんなに顔の色を變へてまでお怒んなさる事はないぢやありませんか。
瀧「そんなに怒る事はない、コレ、貴様は信書の秘密と云ふ大切な事を知らな
いか。八」あなたのやうに大學まで卒業なすつた方とは違ひますから、難い理
窟を知らう筈はありませんけど、それでも手紙の親展ぐらゐは解ります。
瀧「それなら貴様何故開封した、法律の罪人だぞ。ト小聲ながらも鋭き詞に、
お八重は齒を噛み身を顫はせ。八」随分苦勞した仲ですのに、其の女房が見て

悪いやうな女の手紙が阿容々と家へ来て、それを見たからッて法律が何うの斯うのツて、そんなにあなたが袖さんへの義理が立たなけりやア、今夜の中にでもわたしが行つて謝りませう、お宅は日本橋の何處なんです。ト翻さぬ涙は眼に一杯。八「哥澤の總見の日に阿母さんが行き合はせさへしなかつたら、わたしも眞逆、他の手紙なんぞ。トばかり悲し口惜しの有様に、心に邪慳のなき瀧野は、言ひ過ぎたりと少し氣が折れ。瀧「そんなに泣くほど口惜しけりやア、良人を踏附にした事なんぞしないが好い、馬鹿。トは叱れど聲穩か、お八重は顔に前掛押當て差俯向く、時に梯子の口より小僧の聲にて。「おかみさんにお電話、築地の井筒で御座いますが、急用ですッて、其處の卓上へ繋いであります。

第肆 待合之巻

築地川の水黒く岸を浸して、冬の雨降る夜の淋さ、河岸の待合井筒の家の帳場の隣り、茶の間なり納戸なりの六疊の其處の簞笥の前に、蒲團搔卷暖かに寐てるるは、持病重りて床に就きたる主人お榮、其の寐た形に横坐りしてゐる瀧野は、片腕を敷布に埋めて、近々と顔差寄せ。瀧「少しは落着いたか、エ。ト優しく訊けば。榮「ア、動悸は辛と治まつたけど。瀧「治まつたけど何うなんだ、まだ苦いか、エ、胸の處でも微と擦つてやらうか。榮「罰が中るよ。ト血の氣の薄い手を出して、蒲團に突いてゐる瀧野の手先を攫み。榮「斯うやツて死にたいね、お醫者や看護婦が居て忌だらうけど。ト染々と顔を見る。瀧「何うでもお前の好いやうにするさ、けれども最早大丈夫だよ、顔の色も好くなッて来た。榮「ナニもう今度こそ駄目、覺悟はチャンと極めてゐるの、ねエあ

なた、切れてから五年になるね。瀧「ウム。榮「此方に意氣地が無くツて奪られ
 たんだから、卑怯らしく逢ひもしずに、到頭瘦我慢を仕通して、ね、自得だ
 けど可哀想と思つて下さい。瀧「解かつてるよ、其様な事よりやア、先ア確
 りしておいで、お前にも似合はない。ト宥め勵ませば、切無氣に。榮「随分今
 日まで強情に我慢したけど、お醫者の口氣も可怪しい、此の心臓病つて云ふ
 のは、何時麻痺するか知れないツてやうな事を云つて、内々看護婦が覺悟さ
 してくれもするしで、それに今夜は又激く來たもんだから、是非一遍逢つて
 死にたいと思つて、それでお八重さんへ、お重に電話を。瀧「家に入つて丁度好
 かつた、實は少し疝癖に障る事があつて、居室で彼奴と言合つてゐた處だッ
 たんだが、お前が急病で、危いと聞いたもんだから、折角の夫婦喧嘩も零で、
 早く行つてお上げなさいツて、彼奴の方が大慌さ。榮「あなたが汗をかきなが
 ら、顔の色を變へて入つて來て下さつた時にやア。ト涙一杯。瀧「だツて、腕

車なんぞ呼びにやつてる暇にやア断けて來られるもの。榮「目と鼻の近間に
 るながらと、口惜しかつた事も多いけど、お蔭で顔を見て死ねるね。瀧「心細
 い事を云ふなよ。榮「妻女と喧嘩をしたなんて、何うしたの、お八重さんも子
 供は無し、心細いだらうから、可愛がつてお上げなさいよ、商賣人上りの
 やうぢやない、何時も銘仙ぐらゐで、藏前へまで出て働いてゐるツて、界限
 でも本當に評判が好いんだから。瀧「大事にしてゐるよ。榮「お前さんの事だか
 ら、然う大事にもしまいけど、邪慳にも爲やしないでせう。ト息を吐く。瀧「少
 し話を止さう、障ると不可い。榮「お前さんと話をしながら死ねば本望だわ。
 ト吸飲器から水を一口飲まして貰ひ。榮「何んで喧嘩したの、浮氣からぢやな
 いでせうね。瀧「大丈夫。榮「あの子は何うして、エ、太郎の方ぢやない、哥澤
 の方は。瀧「フ、大層元氣が好いな。榮「あなたの顔を見たんで、氣丈夫にな
 った。ト初めて笑顔。瀧「そりやア好かつた。榮「あなた、子供でも拵へると不

可よ。瀧「馬鹿を云ふな。ト身を捻替へる。榮「手を何うして。瀧「腕を突いてる
 たんで、痺が切れたんだ。榮「何う。ト力なき両手を伸ばし、瀧野の其手を搔
 卷の中に引入れ揉む様に擦る、二人はジツと眼を見合はせる。榮「ねエ。瀧「エ。
 榮「親は見送つたし同胞は無し、面倒を見て貰つてゐる人は無し、洒々して
 るるわね。瀧「何時かの話の伯母さんて云ふのは。榮「これも寡婦様だけど、娘
 に一寸氣の利いたのがあるから、過日から二人して来て貰つてゐるの。瀧「然
 うか。榮「後の事は遺言狀に委く書いてあるわ。瀧「遺言狀。榮「ア、心臓が悪
 くなつて、何うしても全治しないから、何時何様な事があつても好いやうに、
 家のお客の辯護士さん達に訊いて、チャンと書いた物を拵へて置いたの。ト
 縮緬と八端との蒲團の間から引出せし帶揚より、縫潰の紙入を出して見せ。
 榮「覚えてゐますか、五年前にあなたに買つて貰つた紙入だよ、エ、あなた、
 泣いてゐるの。ト瀧野を引寄せ顔に顔、お榮の頬には二人の涙。榮「お冷を少

し。瀧「ア、紙入は藏つてお置き。ト吸飲器を差出せば、枕のまよの首を掉
 る。瀧「ウム。ト頷いて吸飲器は自分の口へ。榮「もうこれで死んでも好い、偶
 には思出して下さい、ねエあなた、わたしは眞剣に惚てるたんだよ。ト眼を
 塞ぐ。瀧「何しろ少し氣を落着けておいで、今夜は夜一夜爰に附いてゐるから。
 榮「阿父さんの手前は好い。瀧「嗚アが何んとか云つて置くよ。榮「ぢやア濟
 まないけど居て下さい、お重。ト女中を呼ぶ聲の力なさ。瀧「何んだ。榮「襦袢を
 出さして、着てゐて、よ、更けると段々寒くなるから。瀧「チャンと彪々着て
 来たんだ。榮「火はありますか。瀧「炭斗も来てゐるし、火もある。ト云ふ處へ
 お重が密と。重「お呼びなすつたんぢや御座いませんか。ト云ふ聲聞いて。
 榮「お前袍襦袢を持つて来て上げて、お羽織は疊んで、それから、何か温い物で
 一杯。瀧「氣樂な事を云つちや不可、此方は兢々してゐるんだ。重「御病人に、
 成りたけ何んかお考へなさらぬやうにツて。瀧「ソラ御覽、お醫者様からお

叱責だ。榮「先生に然言つておくれ、此の人の側で死ぬば極樂往生ですッて。重「元氣がお出なすッたんですね。瀧「ア、。ト頷く。重「一時は本當に何う致さうかと思ひましたわ、お客様は二組も御座いましたし。瀧「外へ行つて貰つたのか。重「お寒い處を濟みませんでしたけど、自動車でお送り申して。ト密聲。瀧「わたしが氣を注けて、靜にさして置かう、先生方にはお前さんが氣を注けて。重「只今、温いものを上げるやうに致して置きました。ト起居も徐、瀧野の羽織を始末し襦袢を着せ掛け、熱い焙じ茶を注いで行く、座敷の方には打寄りたる人々の咳の聲など折々聞え、戸を打つ雨の音洩ゆる。榮「電燈が暗いね。瀧「然うか、心地が悪いが。榮「あなた、上の掛蒲團を退けて下さいな。瀧「ウム、寒くないか。ト云ひながらも一枚剥いで裾へやる。榮「瀧野さん、アツ、瀧野さん、手、手。ト我が手を出して捜す體に其の手を攫んで。瀧「お重さん、先生を早く。ト呼ばよる聲に家内の騒ぎ、お榮の呻き。榮「あ

なた、あなた。ト唯二言、注射を續くる醫者は見据ゑて何も云はず、箆筒の上の置時計は、幾時の半か一つ打つ。

四つの袖

上之巻

女の操と云ふは、心か、體か、われく稼業の仲間には、堅氣の人達の察し
も附かぬ義理人情のある事なり。

わたしが未だ松廼家に出て居た頃、姉妹のやうに仲好くした三歳年下のお貞
さん、これが笹家の空看板を買つて自前になつたのには、種々の経緯あつて
の事なれど、畢竟は持つて生れた意地つ張を徹しての一本立、流石舊幕御直

參の家に生れた江戸つ子の血統と、わたしは其の時擲擲つて遣つた。

わたしも續いて年が明け、今の若松廼家と分看板の手前稼ぎ、意氣地無けれ
ば身過世過も無事なれど、お貞さんの身の上、氣の毒とも可哀想とも、これ
も意地つ張からの心柄と唯一口に云へやう歎。

お貞さん今年二十八、其の二十一の時に斯うした事。

徳川の御家人と、世が世の時にバリくして居た人達は何時か死に絶え、お
貞さんが一本になつた頃には、最早その兩親も無く同胞も無く、笹家の看板
を出した時に喜んでくれた親族と云つては、阿母さんの弟の御内儀さん、お
貞さんには義理の叔母さんに當る寡婦さん唯一人、お貞さん愈以て迂濶々々
とはして居ぬ譯なり。

然れど世に謂ふ思案の外、日頃は何んの男なんぞと云つて居た其の男を、可
愛いと思つたが苦勞の初め、これが自前になつたお貞さん二十一の春。

昔の稗史やお芝居に能くある筋、新年宴會のお座敷で顔を合はせたが抑にて、段々お貞さんの方から深くなつたは、日本畫を稽古して居る書生さん、名は磯上重雄と云つて年は二十、女の子より一つ年下なり。

磯上さんは、常陸の土浦と水戸の間の石岡と云ふ處に、代々の造酒家として有名の豪家の二番息子、惣領の兄さんは、先祖からの通名を名乗つて調四郎、年は二十七、相應に東京の學校で勉強したのだと云ふ。

お貞さんの磯上さんも、十九の春中學を卒業して、それから首尾よく専門の學校へ入り、畫のお稽古はするものと、可愛がられるが毒になつて、兄さんの奥さんの御實家、京橋本八丁堀の岩佐回漕店の世話になつて居るにも關はず、晝は固より夜さへ時々明ける始末、眞に不行跡不身持には違ひ無けれど、自分は女珍しい若い身上、相手は年上の商賣人、堅氣さんのお耳には聞辛くとも、われくの口から云はせれば、磯上さんの迷ひ少しも無理で無し。

加之も能くく深い縁でがな、逢つて間も無くの事と見え、其の年の師走の上旬、お貞さんは女の子を産み落し、これにお花と名は附けたれど、家の都合、稼業の手前、折角産んだ樂みの初めての子も手許では育てかね、お喜びにと出掛けたわたしに、お信さん何うしたものだらうねと云ふ。

腹帯を固くして、随分無理な勤め方も爲は爲たものよ、冬からは最早人目に立つにぞ、病氣と云つての商賣休み、其の揚句の今、春は目の前。

「わたしだつて、一人や半分お客の無い事も無いけれど、此處まで我慢をして來たものだから、此の子一人ぐらゐること、今更他人に弱い音を吹くのも。」

ト流石の負けぬ氣にも溜息、後見代りなり寄食人なりの叔母さんお友さんも、言はず語らず苦勞の様子。

人は相身互、殊には姉妹同様の仲、お貞さんの内輪の事も知り抜いて居るわ

たしは、何卒して春を安易稼がせて遣りたいものと思案の中、不圖思出したは、以前松廼家に居た女中お定と云ふが、其の後宇都宮在の實家へ歸り、近所の小商人へ嫁いて、此頃子供が出来たよしを、松廼家の姐さんから聞いた一條。

「ねエお前さん、氣には染むまいけれど、切て斯うにでもして見たら何う。」
ト子供を里に出す談をすれば、物の十分も黙つて俯向いて居たお貞さん、

「里つ子に遣ると、親子の情愛が薄くなるさうですなエ。」

ト、ホロリと一粟、産んだばかりでも我が子は斯うも可愛いもの歎。

それでも外に差當つての分別なく、叔母さんと二人して先アくと慰め諭し、松廼家の姐さんとも相談の上、宇都宮在の干瓢屋兼百姓の、關口久藏と云ふ彼のお定の良人の許へ、わたしから聞合せの手紙。

「此方ではかり極めた處で、先方にも其の生れたばかりの子があるものを。」

トお貞さんはまだ未練。

「何アに、田舎の御内儀さんなんて云ふ者は、體は丈夫だし、物に屈託ないから、お乳は澤山だらうし、子供二人の面倒ぐらゐる。」

わたしの言種、随分獨極めの當外方なれど、お貞さんもわたしも可なり可愛がツて使つた臺所の奉公人、自分が迷惑ならば、何處ぞ外々へ世話をしてくれるぐらゐの深切は有らうと、夫婦の人からの返事を心當にして待つて居ると、手紙を出してから四日目、此方の子供は生れて一月経つか経たぬ中、不圖大熱で死に、淋さに濕々として居る最中、お貞姐さんの實子を育てさせて下されば、悲さも紛れ、乳の張るも助かる、御都合次第一日も早くお預かり申したい、お連れ下さるかお迎ひに上らうか、と拵へ事のやうな好い返事、飛んで行つてお貞さんに話すと、

「そんな丈夫な人達の子でさへ、他愛も無く死ぬのなもの、不養生は仕放題

のわたし達の腹から産れた子が。」

ト直ぐにもお花さんが死ぬやうな心細い聲。

「お信さんが不意と想着いて訊いて下すつた先で、願つたり叶つたりと云ふ挨拶は、能く縁があるのだから、思切つてお預けが好い、何アにお前さん、物は取りやう、先方の嬰兒の歿つたのは、此の子の壽命のある兆ですよ。」
 齡は齡だけ、叔母さんは巧く宥める、お貞さんそれにも心は濟まぬながら、直ぐ来る春を稼がねば、自分の身の上、磯上さんとの仲にも支障。

「ぢやアお信さん、何卒宜く。」

ト淋い笑顔に唯一言、お花さんは他人の乳を呑むに極まる。

お貞さんは早速磯上さんに話しは爲たものよ、未だ書生の身の、勿論遮つて何うと云ふ仕法も無し、堪忍してくれと云ふが心の千萬言、わたしも其の時行合はせて居て、何とも云へぬ心地になつた。

肥立は悪く無けれどお貞さんの體、東京から三十里近くもある宇都宮迄の汽車の旅、飛んでも無い事と懇々と押止め、七夜を過ぎたばかりの子を叔母さんが抱へ、萬事の世話には磯上さんが附いて、寒い風の吹く朝を上野へ。

わたしの不測な着想から、嬰兒のお花さんが宇都宮への里子、阿父さんの生れ故郷の石岡と餘り離れぬ處へ行つたも、丁度久藏夫婦の人が預かつてくれたのも、これ皆前生からの定まる運、お貞さんの一代の運の半分は、後で思へば最早此の時に分つて居たのなり。

諸一夜明けてお貞さん二十二の春、復商賣に出て見れば、藝は好し容色よし様子よし、固より賣れ盛つて居た人の事、何彼と煩い噂のありはしても、これが世間に無い事では無し、根掘り葉掘りの野暮も無くて、以前に變らぬ座敷の敷、しかも忌味の談の減つたは、過失の功名か、勿怪の幸、お貞さん吻と息。

斯うして稼業は順當、お花さんは息災に生ひ育つ、磯上さんとの仲も無事と、先づ悪い事無しに前後三年、お貞さんが二十四の秋までは過ぎたれど、其の儘に濟まなかつたればこそ此の話。

日脚短き秋の午過ぎ、胡散臭く笹家の家へ訪ねて来しは、六十許の薄白髪、是非御主人の姐さんにお目に掛かりたい、私は磯上の家の支配人大萩和助と申す者と、門口から早事有り氣の御挨拶。

何となく胸騒ぎのするを無理から鎮めて、お貞さんが逢つて見れば、お國訛の實體なる言辭にて、重雄様に御良縁あつて、此の度御分家の上嫁御様をお迎へなさると、承れば此方様とは永い間の番ならぬお馴染、それを存じて態と私が御相談に、と云ふは切れるの外に無しと、お貞さん例の氣性に直ぐ勃然と、

「では、約る處が切れてくれろと仰有るのですね。」

ト捻じ掛ければ、手を振つて、

「否、決して左様では御座りません、御婚禮を他所に見てさへ下されば、期して御側室にでも致して。」

ト半分聞いて尙赫とし、

「折角の思召で御座いますが、先アお断り申しませう、私と磯上さんとのお約束は、其様な事ぢやア御座りません、態々お話にお出で下さるくらゐでは、定めて深い経緯も御存じで御座いませうに。」

ト顔や聲には似ぬ手強い返答、何うであらうと磯上さんと二人の仲、妾側室などとは思ひも寄らぬ、然しそれも慾得で云ふでは無し、此方へ引取り何んの良人の一人ぐらゐ、わたしが賣物の小唄の師匠をしてなりと、必と立派に立て過ぎしにして見せます、とズツケリ云はれて、支配人さん大きに困り、

「イヤお話しは一々御道理では御座りますが、何を申せ都會と違つて、萬事昔

氣質の田舎の事で、兎角血統や家柄を申しまする故。」

ト聞いてお貞さん又納まらず、今の此の有様になつて居て云ひたくは無けれど、家柄血統を言立てる日になれば、磯上の方に何劣らう、見縊つた御挨拶はお使柄にも似合はぬと、屹と云つて置いて、

「兎に角磯上さんのお腹を更めて聞いて、それからのお返事に致しませう、これ程の事を、御當人が眞逆に知らないと言ふは御坐いますまい。」

ト何事も受附けねば、支配人は見脈に怖れ、切上げ悪く匆々に立歸る、定めて悪婆と驚いた事であらう。

突然の縁談沙汰から切れ話、お貞さん怒るまい事か、シリ／＼と逆せて、大萩さんの歸つた後、三度五度と手段を變へ科を變へて、磯上さんを呼出しに掛かつたれど、岩佐さんの家の人達相手にならず、お貞さん到頭自暴酒に涙を紛らして、其の夜は座敷を斷つての八つ当たり、一日も睡なかつたとは可

哀想。

處へ其の明くる日、立替つて訪ねて来たは磯上さんの阿母さん、お貞さんに逢つての談が斯う。

自分の家は土地での舊家、親類縁者は堅い一方、それに又今の戸主は先妻の子、重雄は後妻の自分の生みの子、甘やかした爲の不始末と、八方から陰口さると近頃の辛さ、何卒暫らくの間辛抱して居て下され、人の噂も七十五日、先へ寄つたら又お世話の爲やうもあらうに因つて、と涙ながらの切ない頼み、現在の親御が實の我が子可愛さの心の中を察して見れば、自儘勝手の理窟も通せず、

「では決然断念めませう。」

ト今は却々顔色も變へずに云つたお貞さんの一言が縁の切れ目、お濱さんと云ふ其の阿母さん、何うやら腑に落ちぬ顔色であつたとは然うありさう、堅

氣さんには寧ろ薄情とも不實とも。

中 之 卷

何う都合してなりと、其の中に必と會つて、とペンで走書きの一通、それが縁切り話の三日目に磯上さんから來たばかり、次の日には彼の支配人さん、若干包んだものを恭く持参したるを、お貞さんケンもホロ、に突返して、金づくのお話なら今日までわたしが磯上さんゆゑに使つたお財を書出して上げますから、此の年末に金利を附けてお拂ひにお出でなさい、手切れ足切れを取るやうな仲ならば、立派に旦那に崇めて置いて、貴下の御主人の身代の半分ぐらゐ、疾うに玉なしにして上げて居ます、わたし等風情に打遣るお

金があるなら、國へ持つて歸つて挽割でもお買ひなさるがお利益でせう、と心にも無い毒口、律義眞つ法の大萩さん、目を白つ黒して居たとの事。やがて秋も暮れて、菊花も末枯の十一月の下旬頃、戀し口惜しに身も瘦せたお貞さん、唯一本の手紙限り音沙汰なき男の心を恨む側から出る未練、時雨で寒き午過を、火鉢の前の洋盃酒、思出したやうに三味線取つて、磯上さんが大好きであつた上方唄の『四つの袖』、爪弾に弾く合の手も理に落ちて、唄は時々口の中、『寧ろ逢はねば斯うした事も、眞にあるまい由なや辛や』、お貞さん鼻を詰まらせてホロ／＼と熱い涙。處へ突然入つて來たは磯上さん、オイと云つたばかり立つて居る。貴下と一言、熟と視たお貞さん、三味線を置くなり飛付くやうにして、磯上さんの手を掴んで、自分の居た坐蒲團の上に引据ゑ、

「あなた。」

ト又も唯一言、叔母さんは出て好いやら悪いやら。

お貞さんの怨恨、磯上さんの辯解、何うの斯うのは云ふに及ばず、畢竟磯上さんの云ふ處は、親や親類が自分に隠して分家の相談、嫁にと云ふ其の相手は豫て懇意の一家中の娘、お前との縁を切つてから結納、婚禮の済むまではと此の身は宛然石岡の家に座敷牢同様の閉籠め、然れば便りも自由にならず、八丁堀の岩佐の家から、阿母と大萩達に連れられて石岡へ歸る時、岩佐の家の女中に密と投込ませたが日外の一通、實も不實も今更云はれる仲で無し、何事も阿母に免じ我慢してくれ、と女房よりも隔てぬ現在の情人の前に頭を下けての打明け話。

「何れ其様な事だらうとは思つて居ましたけれど。」
弱いは女心、濟みませんとお貞さん今度は袖に詫涙、

「それにしても、今日は何うして。」「又阿母と支配人に引張られて、岩佐の家

まで出て来たのだが、それは、東京へ家を持たせると云ふ譯で。」
ト云ふ顔を見て、

「ぢやア御婚禮は最早済んだのですね。」

ト念を押せば、磯上さん黙つて了つて何も云はず。

「何うも仕方がありません、今時の世の中だから、若いあなたの料簡次第に爲れば爲る事だとばかり思つて居たのが、わたしの大きな過誤でした、其様な堅いお家の若旦那に、藝妓風情のわたしが。」

ト蒼白い顔の口をキツと結んで、片手に火鉢の縁を掴む。

折から門に格子の音して、案内を乞ふは磯上さんの阿母さんの聲、お貞さんは氣が附かねど、磯上さん忽ちハツとして、立上るなり何の思案も無く、勝手手の隣の湯殿へと身を隠す。

履物は直ぐ叔母さんが藏つたを承知のお貞さん、磯上さんの帽子外套を手早

く奥の戸棚へ押込み、儲立出でと挨拶すれば、阿母さんは例ながら慇懃に、先頃の事、其の後の事、何や彼や云つての後、重雄が此方へ参りは致しませぬか、との尋ね、寧ろ明白にとも思ひはしたれど、互の身の後の面倒、それも煩しとお定まりの間に合せ、お話のあつての後は、お出では固より、お手紙さへ、と白々しく、

「随分キビ／＼と思切りの好い仁でゐらッしやいます。」

ト些と壁訴訟やら當擦り、

「若し何んで御座いますなら、お上り下さいまして。」

ト臆を据ゑての言分に、然らば家捜しとも云はれず、

「何時もく悪い耳ばかりお聞かせ申して濟みません、今日は嫁の實家の親達も、岩佐の宅へ見えますもので御座いますから、彼者が落着いて居つてくれませんか。」

ト眼を露ませ、

「飛んだ失禮を申しました、お詫には何れ又更めて。」

ト悄然として出て行く人の後影、お貞さん障子をハタと締めて火鉢の側、死人のやうになつて居るところへ、色蒼褪めた磯上さん、足音も無く來で立つたまよ。

見れば着物の裾のあたりから半、素足は赤くなつて居る。

「あなた、何うしたの。」「湯殿へ隠れたのだけれど、阿母に捜されると思つて、風呂の水の少し張り掛けてある處へ。」

「足が先ア鐵つ凍になつて。」

ト磯上さんの足の先を握つたお榮さん、

「其様に阿母さんが怖いの。」

ト見上げれば、密と見下し、

「怖くは無いが、可哀想なのだ、随分苦勞をさして居るから。」

ト聞くと其のまよ、お貞さん、磯上さんを膝の處に引据ゑて、氷のやうな兩足を我が肌を押當て、濡れた上から獅噛み付いて、

「無理を云つて濟みませんでした、わたしが悪う御坐いました。」

着物の濕り諸共に涙も徹る膝の上、磯上さんの落す雫は鬚の上へ。

「斯様な感をしてども今日あたり逢へると思つたら、子供を呼んで置いて貰つたものを。」「わたしもあなたに見て貰ひたい。」

それもこれも叶はぬ願、斷念めるより外ないを切ての斷念と、磯上さんの着物や足袋の乾く間を、浮かぬながらも酒にして、

「あなたの入つて來る時、わたしの演つて居たものを聞いて。」

ト顔を染々と視れば頷く。

「最々朽ちなん四つの袖なら、まだ張合がありますけれどもねえ。」

「もうこそ其の着物も要らなくなるのでせう、男物なんぞ早く解いて了ひませう。」

ト涙の無理笑、

酔ひもせぬ酒に疲れて、見交す顔に夕暮の片光明、叔母さんは何時か何處ぞへ出て行つたれど、人目憚る別れもなく、切れぬ、切れまい、子まで生した深い縁の二人が仲、折さへあつたら逢はう逢ひませうと卒となつてのお貞さんは尙且未練、妾側室も厭はねど、稼げるだけは出て居て情人で逢ひ通さうの心の誓、漸く笑顔の別れ際、

「足袋は新規にお買ひなさいな。」「新しいのを穿いて歸るのは變だ。」「又阿母さんですか。」

ト外套を着せながら、

「何んだか本意ないね、あなた。」「着物は解いて了うなよ。」「其様な殺生

な。」
果敢い事に慰め合ひて内と外、これが當分の別離とは覺悟したれど、諸三日五日と經つに連れての心の淋さ、お貞さん酒浸しになつて、それから兎角陰氣臭く、秋頃の自暴元氣さへ失せ果てよ、座敷も平常も茫然として居るにぞ、叔母さんなりわたしなり種々に異見すれど、其の後二度とか磯上さんから便りがあつた限り、それも世帯を有つた處は何處やら書かず、返事の爲やうも無き片便、實とも不實とも他から理窟を附けて慰める種なければ、お貞さんは愈鬱ぎ、其の二十四の年末も五の折角の初春も不快く過して、内輪の苦さは一日増し、さしも賣れ盛つたる笹家のお貞、七日に二日はお茶の夜も出來て來る。

斯うなると復自棄にて、お貞さん深酒の疝癢、動もすれば叔母さんに當り散らすに、これも終ひにはホツとしてか、實家の親類の世話にて縁付くと言出

す、五七面を下けての御婚禮、イヤお若い事、と冷笑つたお貞さん、他人は勿論我が身さへ何うともなれと輪を掛けた捨鉢、二月の下旬頃からは、三日に揚げぬ宇都宮通ひ、

「慾も得も知らなくつて、子供ほど可愛い者は無い。」

ト歸つて來ては叔母さんへ聞けがしの獨語、それが三月上旬の或日、突然に、わたしは宇都宮へ行つて稼ぎます、叔母さんは心置なくお嫁に行つて下さい、と云ふ。

驚いて叔母さんが仔細を聞けば、お花の顔が見たい、東京と云ふ土地が厭になつた、親類縁者と云つては唯の一人も無くなつて了つたわたしは、先祖代代の江戸も戀しくない、何處で暮らさうと親子二人、斃死しても口惜く無い、先祖のお墓はお寺へ頼んで置く、と叔母さんも最早數に入れぬサバノとしした自暴のやん八、聞付けてわたしも止め、松廼家の姐さんも異見して見たれ

ど止まらず、諸道具残らす賣拂つて不義理を片付け、自分の着物の傷んだのと、磯上さんの爲に拵へて置いた男物とを叔母さんに遣り、凡そ五六百のお金を握つて旅行とは男ゆゑの苦勞の果の氣の毒さ、出立の前の晩叔母さんとわたしと三人笑つては泣き笑つては泣き。

其の中でのお貞さんの談、わたしだとして狂人では無し、藪から棒に斯う想着いた譯で無く、一つ東京の中に磯上さんが夫婦仲よく暮らして居ると思ふが忌、第一には座敷も無く、此のまゝ生腐になるを承知で阿容々々と此處に居るが忌の旅稼、電話を賣つたお金の存外残つたを身に着けて、里親の世話で話の纏まつた宇都宮の杉本と云ふ家から、本名のお秀で出るに極めたわたしの心、身寄便も無い此の體。

「叔母さん、我儘ばかり云つて濟みませんでした、皆お酒が云はしたのだと思つて堪忍して下さい、姐さんにも子供の時から随分御厄介になりました

ねエ。」

空屋のやうな家に、損料蒲團に包まつて夜を明かし、上野の汽車の窓際の泣別れ、此の後のお貞さんの身の上は、唯人傳に聞いたばかり、笹家の家を引拂つた叔母さんお友さんの其の後は、由縁なければ終ぞ聞かず。

下之卷

由緒正しい江戸つ兒は云はぬ事としても、東京の本場で仕上げた一人前の立派な藝妓、それが縁なればこそ、生若い書生さんに打込んで、末は何うなる身の上か、生れ故郷を未練氣も無いやうに振捨てよ、木から落ちた何とやら、體一つの旅稼、女心と云ふものは、愁ひの男よりも斯うなると強いが常と

は知りながらも、氣に掛かるはお貞さんの起臥、われ人ともに、女の盛時は短いもの。

地方とは云へ、都近くでは指折の繁華の地、宇都宮から杉本のお秀と云つて店借同様で出たお貞さん、流石にギリリと目に立ちて、弘めの日からの大繁昌、藝は確、お酒は飲む、忌味一切お断りの野暮を云つてもお座敷の敷を減らさぬ技倆を、見込んでか、意地からの無い物強請か、土地で有名な資産家麻問屋の嫡矢さん、遊興の方も家標で通つた立鼓さんと云ふが、手を廻しての金びら、到頭唯で無くなつたは、お秀さんが出た其の年の夏頃らしい。何うせわれく、風情の稼業、堅いと云つても男嫌と云はれても、何時が何時まで聖人君子で居られやう筈は無し、臨機應變、詠と歌、我が身可愛いの願引は、堅氣さんも商賣人も同じ事、五歳になる娘はあり、自分は二十五、幾ら意地つ張でも強情でも、それだけに又氣の廻るお秀さん、必と考へたに違

ひ無く、秋頃には最早立鼓さんを旦那にして、安氣に稼いで、押しも押されもせぬ一流の大姐。

それでも世帯は面倒とて、自前にはして貰はず、面白可笑く客と藝妓で過す中、知れるとも無く明かすとも無く、お秀さんと立鼓さんとの仲にはお花さんの事も明白になつて、愈間隔が除れ、二十六の春頃からは、慰半分の勝手勤、それでもお客は天の邪鬼、尙且お茶の晩とては無し。

これまでの間の月日、然う短い事で無けれど、何うしたのやら、磯上さんから唯の一度も音信無きにぞ、お秀さん終には我慢しかねたらしく、暑中見舞にとて久々でわたしへ寄越した手紙の中に書いた事には、世帯の持ち初に周囲を恐れて、住所も知らして寄越さぬは未だ勘辨の爲やうもある、此方の居所は變つて居ても、お前さんの家へ一寸電話を掛ければ直ぐ知れる事を聞きもせず、お花の里親へも端書一本寄越さぬは、去る者日々に疎しとやら

か、それも急に今悟つた譯で無けれど、然りとては不實者、阿母さんの怖か
 ツたは分つて居れど、女房が怖いやうな男は最早此方も御免、とは云ふもの
 の子供の親、成人してからも、男親の顔を知らず終ひに死なせるかと思へば、
 因果な阿母を有つたお花が不便、お信さん此の愚痴だけは聞いて下さい、と
 染々とした文句、わたしは返事の書き様に困つたり。

然し、それもこれも商賣繁昌無事の中はまだ好けれ、秋口になつて、立鼓
 の家の御内儀さん、誰か胡麻摺か色敵かに煽られたものと見えてお秀さんに
 祟り、御亭主の出入に煩く其の事を言立て、何んでも子供まである仲、行く
 行くはわたしを追出し、其の女を後へ直す氣に違ひ無い、それで貴下濟みま
 すか、と疊を敲いての苦情、奉公人の手前は關はず、實家へは泣込む、それ
 が何時かバツとして新聞へ長々と出る、又それを文句の種にして御内儀さん
 泣き喚く、此の御内儀さんと云ふ人、お作さんと云つて年は四十、旦那より

四歳下、大きな男の子が二人もあるのだとの事、其様な身の上でさへ女は嫉
 妬取越し苦勞、それならわたし達は何うして居れば好いのだらう、とも思ひ
 はすれど、大事な男の貸惜み、減多に他人の事ばかりは云はれず、又お秀さ
 んも嘸。

諸立鼓さんの先アさくも古くなつて、奥方の逆鱗日に増し烈く、さしもの
 遊び人も餘り世間の煩いに根負して、これから暫くの間、月に二三度の遠出
 ぐるるにして置かう、狭い土地での此の評判は、幾ら暢氣な己にも應へる、
 商賣上の信用に關つて来てはお互に詰まらぬ、との割つての談。

「女房つて云ふ者は、其様に怖い者ですかねえ。」
 トお秀さんの肚の裏には何や彼や。

「少し氣を抜くだけの事だ、其様な憎まれ口を利くものぢや無い、男が女房
 のギヤア〜云ふに弱るのは、女房を怖れるのでは無く、世間を怖れるのだ、

畢竟自分が可愛いからだ、可笑からうが黙つて居てくれ、悪いやうには爲ないから。」

ト遊びの劫を経て居る旦那の説得、道理と思へば眞逆に取つて附けた駄々も云はれず、

「それでは當分神妙にして居ませう。」立て過ぎしにしてある情人の顔でも見て、鼻の下を長くして居るが好い。」

ト擲掄ふはお花さんの事、何んと云つても心頼になるのは他人では無い、とお秀さん、歸つてから妹分の丸子と云ふのに熟々と云つたさう。

それから其の後、お秀さんは約束通り遠かるやうに爲て居たれど、十日逢はずに居る事に何んの効も無く、一晚逢ふのは直ぐ響いて罪になる鎗矢さんの家の捫着、立派な俵の二人もある癖に、何を不安心に思つて四十面の嫉妬、今更女房を追出すやうな良人か、身上を曲げるやうな篋棒か、二十年來連添

つて居て、其のくらゐの辨別が附かぬとは、呆れ返つた馬鹿女、此方なんぞは一年ばかりの中に肚の底まで知つて居る、とお秀さんの例の疔癩、或夜の座敷の酒機嫌に、立鼓さんに面と向つて毒吐くと、

「其處が女房と商賣人さ。」其の女房が氣に喰は無い。」

明いて居た障子の外、麥酒の洋盃は庭石に粉微塵。

立鼓さん笑つて大抵に遇ひ、後々も偶に逢つて密々と遊ぶ中、此處に又一つの談。

十月の末の事、阪地から名古屋、横濱、東京と打つて、宇都宮へ廻つて來し義大夫の一座、切語は豊竹宮子太夫三味線竹澤龍市、前景氣から大したものにて、愈となつては芝居の小屋にギツシリの客、初日も二日目も。

其の三日目に行つた彼の丸子さんと云ふ二十になるのが、絃の龍市と云ふ三十幾歳の瘦容を見染めて、姐さん一度遊ばして、と一緒に رفتつたお秀さんハ

打撒けての依頼。

「旦那に知れたら何うお爲だ。」

ト止させやうとすれば、急凝りの意地穢、是非と云つて承知せぬに、高々五日ぐらゐの興行、後腐もあるまじと、その夜打出してから、氣の置けぬ家へ龍市さんを座敷にして呼び、知己の一杯、而して別れて次の夜の首尾と、其處までは運びしが、愈の際になりて、丸子さん旦那の座敷が脱けられず、焦慮るを胡散と感付かれてか、何時に無く旦那お泊りとなつて、双方の間の使三度四度、男の來たのは打出し後とて、其の中に直ぐ十二時、お秀さん飲んで饒舌つて、技倆限り繋いで見たものよ、到頭丸子さん先方に生擒と極つては、最早意地にも根にも纏まりが附かず。

「姐さん、あんたわたしを弄びなさつたなア。」

ト龍市師匠真劍に然う思つたか、飲ける口に自暴氣味の酒、藝人の身の尙更

切上げの附かぬ一段。

「相手が旦那なので、出ない譯にも行かず、行つたが間違ひの基で斯様な事に。」

愚痴は種切れ、辯解も一つ事、

「わたしが皆鈍痴なものですから、師匠、斯うして下さいな。」

グイと呷つて、熱と視たお秀さん、

「飲み明かしも御迷惑でせう、と云つて、此のまゝ睨合つても居られますまい、お互に引込が附くやうに、今夜はわたしが身代に立ちませう、此方も不祥、贅澤は云ひツ事無し。」

自暴で無し、身を粗末にするで無し、斯うなつた此の場合此の肚の据ゑ方、世間は理窟ばかりで通れず。

結び違ひの縁の糸、お秀さんは思ひも寄らぬ人に馴染み、丸子さんは旦那の

機嫌を取直して、悪戯氣は其のまよのお流れ、師匠の方は二日の日延べとなつて、お秀さんと其の二晩の又の首尾、次の朝は新聞に早浮名。

儘よ、女房の小煩い男の世話になつて、日蔭の者の意氣地無さを悔まうよりは、氣隨氣儘の旅歩、藝人に藝人、飲助に飲助、勝手放題に暮らすが徳用、人間何時まで生きるものか、此の足腰の達者な中に稼いで遊んで、何うにか月日の経つた頃には、大事な娘が一人前の新造にならう、田舎などへ置けばこそ、黒焦女房から隠子呼はりの疝も立つ、世界の果まで母子一緒に行くが本望、と龍市に得心させて、お秀さん俄女房、太夫の一座が一日逗留の間に、足下から鳥の立つやうに、杉本にも話し、立鼓さんにも話し、衣類手道具を一行李にして狂氣染みた旅支度、杉本の家のお主人は、

「何處に居るも同な體では然うも思はう、氣の毒な事だ。」

ト男ながらも苦勞人の思遣。

「わたしのやうな男運の無い女も少いでせう。」

トお秀さん一雫。

「變な事になつて了つたのねえ。」

ト丸子は悄氣た顔。

「斯うと知つたら、年期でも極めて置くのだツたに、己も立鼓さんも惜い事をした。」

ト主人の戯言、何にしる肝腎な娘をと、關口の家へ引取りに行けば、里親二人は泣きの涙のそれはまだしも、何うにも引離すに離されぬは常人のお花さんの不承知、

「此の阿母さんと行くのは忌だ、自家の阿母と一緒に居るんだ。」

今年六歳の物心あるが愁ひ毒になりて、生の母より育の母を親とする可悼さ、欺しても吐つても、久藏夫婦の人に獅噛み付いて離れぬにぞ、御内儀さんは

涙の止め度なく、

「お願ひですからもう一二年預けて置いて下さい、里扶持も要りません、音信も無ければ無いで好う御座います、姐さんの體がチャンとお極りになるまで、確りお預かり申します、此方からお知らせする用が出来たら、松廼家の姐さんの家か、若松のお信姐さんの許まで云つて上げます、短氣な事をしないで、一日も早く東京へ歸つて落着いて下さい、餘り突然で夢のやうだ。」ト飾り氣も無き眞味の異見。

「何卒して、男親に一度逢はせたいと思つては居ても。」

効なき事と斷念めてか、然らば當分の入用にと、お秀さん可なりのお金を里親に預け、泣出しさうに顔を背ける我が子憎くも後髪、歸つて此の晩杉本の二階で、丸子さんへ遺物にと云つた三味線取つて爪弾の『四つの袖』泣明かしたやら次の朝お秀さんの眼は眞赤。

旅興の常として、先から先を急ぐ宮子太夫の一座、これより福島仙臺と乗出す中に、笑顔淋いお秀さん、汽車の窓から停車場の見えなくなるまで其處に未練の眼の色は、里親が連れて来るかの心待の、斷念め切れぬ故でがな。狂人染みた旅立をしたお秀さんは狂人か、洒落か戯事か、思案の末か、去年の暮、お秀さんの縁で丸子さんがわたしの家の抱妓になつた處から、宇都宮での概略は分つたれど、寒さに向つて寒い方へ行つた其後の事は分らず、お花さんは、磯上さんは、と思ふ中に又一年、今年の二月になつて、紀州からお秀さんの年始狀、大凡を云へば斯う。

其の後は永らく御無沙汰、延引ながら御年始狀を差上げます、風の便に聞けば、丸子さんが住替へて行つて居るとの事ですから、然うならば大抵は御存じでせうが、去年の夏、桐生前橋高崎と歩いた時、お花は無理から引取つて、今も手許で育て居ります、玉蜀黍のやうな頭髮も少しは黒くな

り、手足の色も段々剥け、田舎詞も大分直つて参りました、今年は大阪に落着いて、小學校へ入れる意、唄もボツ／＼教へて居ますが、義太夫などは決して習はせません、龍市の我儘なものには困つて居りますが、娘がもう少し大きくなるまでは、辛抱をして居ります、此頃お花が『四つの袖』を覺えたので、愚痴を聞かして、親子で泣きます、然し石に噓り付いても、娘は一人前にして、血統の正しい、両親に勝つた身分の男に必と添はせます、實意のある男を必と持たせます、今年娘は八歳、わたしは明後年最早三十です、去年素通りをしましたから、丸子さんからお序に杉本の家へ宜く、廢業の事や何や彼や、後で定めし御面倒でしたらうとお察し申します、叔母さんの居所を御存じでしたら、何ぞの時にお言傳を願ひます、唯今では廣い世界に親子唯二人です、嬉かつたも男、苦勞も男、姐さんも丸子さんもお達者で、當分又お便を怠けません、東京と云ふ處を思出したくありません。

せん。

龍市さんの家は何處か未だ尋ねず、『四つの袖』を幾何十度か弾いた涙の生遺物、其の三味線は、丸子さんが有つて居て、今わたしの家に在る。

仇
花

待合山吹の娘お菊さん、まらあひやまき 齢は十八、とし 色白の面長、いろしろ 脊丈はスラリと中肉にて、せうぢ 人の目に着く容色の上に、ひとめ 頸元の色氣何とも云へず、のりもと 此處にはわれく女でも惚々する。おんな

兩親に早く別れてのお婆アさん子、りやうしん 嘗めるやうにして育てられたのなれど、な 性來にや怜悧にて人愛あり、うまれつき 稼業柄の如才なく何彼と云へば、かせふがら 誰でも直ぐに
トロリとなる。

お客は勿論出入る程の男の、きやく 何とてこれを見免すべき、な 種々に仕掛くれど、いくく

抜けつ潜りつ相手になつて相手にならず、ぬ 堅いを賣物にして、かた 今の年になる
までまだ生娘。ま

尤も、斯うした稼業の者には、もつ 素人よりは却つて手堅い處もあるなり、しろ 色の
戀のと旦暮に騒ぎ散らす中にて、こひ 切ない事可笑い事辛い悲いの數々を知つ
てるる身は、こ 浮氣をそれ程面白く嬉しいものとは思はず、うは 別れての歎捨てられ
ての怨、うら 女の涙は男ゆゑとばかり初心な胸に沁入つては、おんな 寧ろ男の怖ろしく、
夜も晝もなく逢ひつ浮かれつする人達を見て、よ 氣が知れぬと不思議がるも無
理でなし。

根が堅氣のお婆アさんの手解にて、ね お菊さん小さい時より長唄のお稽古、かたぎ そ
れから茶の湯活花、ちや 一時は琴も習つたのなれど、ゆいけはな 此處の家へ遊びに来る岸本
さんと言ふ口の悪いお客に、い 土器で冷酒を飲ませる氣かと、か 復習つてゐる鼻
の先でツケくと冷かされて以來、の バツタリお琴は止めとなり、さ 其の代りに

河東とは、堅いやうでも稼業が稼業、お菊さん満更の野暮でなし。俵縁と云ふは妙なもの。

床の紅梅咲き遂けて、三月も末となつた或夜の事、山吹へお馴染の三人、浦松、澤井のお二人と岸本さん、藝妓を五人呼んで一遊びのお座敷、わたしも其の中に入るたゆゑに、出来上がった事の始末は知つてゐる。

浦松さん澤井さんは十時頃お立ち、残つたは岸本さんと三吉家のお千代さん、これは一年も續いてゐる想合つた深い仲。

仔細あつて御免蒙つた後口、わたしはお帳場でお菊さんと一寸お饒舌をしてゐると、お菊さんの阿母さんの姉さんで、此の山吹の女主人お歳さん、水菓子などを出してくる。

此の三四十分の間に奥二階で起つた捫着、お千代さん今年二十五の分別の無い齡でもなけれど、われ々稼業の者に取つては浮氣盛りの年増の初まり、

何う浮はつての間違か、去年の春から前後二年の岸本さんに不實をして、今夜捨鉢の焼糞、可なり世話にもなり、世話も焼かしたを皆夢にした仕方には、流石暢氣な道樂者岸本さんも呆れ返つて、何か少しは云つたさうなれど、一體がサツパリした人なれば、未練氣なしに今が今の別れ話、お千代さんは酔つて歸る、岸本さんはわたしの居るを見て又座敷にし、わたしが何か云はうとするを揉消しては、餘り深くは行けぬお酒をチビリく飲む。

友達のやうに古い馴染のお客、お菊さんはお帳場からのお干魚を持つて来て、岸本さんの側に坐り、彼様に仲が好かつたのに何うなすつたの、と聞く。

何うも斯うもあるものか、野郎形なした、と岸本さん他事のやうに平氣なれど、これを機會に段々二人して尋ねて見た處、二三度不味い事のあつたを我慢して來ての今夜、餘りの馬鹿々々しさが本となりての一文句、聽ては何方からともなく愛想盡かしの鉢合はせ、おれも好い筥棒だ、と苦笑、わたしも

薄々経緯は知つてゐる、これは確にお千代さんの方が良くなし。

一年十幾月の戀仲も、怒るでなく、泣くでなく、他人と一座の歸り掛け、僅一時間ばかりの言合の中に、斯うもサバくくと切れるものかと、お菊さん今更のやうに感心すれば、岸本さん、これだから女は怖い、と笑ふ、仕方なしに、女にも種々あります、とわたしが云つて交つ返される。

お千代さんは外に客情人が出来て、慾と轉んだからの此の始末なり。

岸本さん、十二時近くにお歸り、次の晩又お座敷、藝妓はわたしばかり。

一日隔いて又呼ばれる、同くわたし限りなり、お菊さんが二三度話しに来る、岸本さんは、何うだ琴でも聞かせないか、と擲擲ふと、お菊さん少し紅くなつて、又そんな事を、覚えてゐらツしやい、ねエお藤さん、とわたしを味方にしながらも羞む。

此後四五日して又出ると、明日歌舞伎座へ行かうとなる、お菊さんとわたし

と女中のお筆さんと、岸本さんと四人。

愈の當日行つて見ると大入、前々からの附込でなきゆゑ、われくは西の棧敷の八へ入れられる。

三幕目が開いて、女三人神妙に見てるながらも、岸本さんの廁の長いが氣になり、わたしが後の戸を密と細目に明けて、何の氣もなく廊下を覗くと、何處の藝妓か二十歳ばかりの滅法美しいのに両手を搦まれながら、岸本さん立話をしてゐる。

菊イちゃん、と小聲に呼んで覗かせれば、浮氣者ねエ、と云つてわたしの顔を見る、岸本さんとわたしが、何うにかなる者のやうにでも思つてゐるらしい、道理と云ひたけれども感違なり。

此の晩遅く山吹から歸つて一座敷勤める、勤めねばならぬ人なり、岸本さんは無事に一時頃歸つたとの事、後で考へれば本當なるべし。

縁は異なるものといふは此處、お菊さん何時とはなしに岸本さんに徒惚、是も後で聞いたには斯うなり。

お千代さんの不實に女憎く、永い馴染の岸本さんを氣の毒がツてる中に、流石大家の道樂息子、齡は二十八、男は醜くなし姿態はよし、其處此處で、美いのにチャホヤ云はれるを見ては、男馴れぬ氣に何となく好いたらしく、今まで然もなかつた人の顔見たくなりて、お菊さん、岸本さんの來る度に段々とソツつくを、お筆さんが氣が注いで、探を入れると耻づかしがる、愈と思つて岸本さんを嬉がらせに掛かると、飛んだ事を云ふ、と是れは頭から茶にして相手にならず、日頃當人の堅いを知つてゐるゆゑか、それとも覺つてゐながらの空恍か。

何にせよ、岸本さん其後は山吹へ幾ら足繁く通つても、呼んだ藝者に係り合はず、わたしの目からはモウ〜お菊岸本相惚なり。

それでも確り者の女主の監督、お婆アさんの大事取り、お筆さんも内實は隠し目附かして、此の三人の目を潜らう隙なく、又お菊さんにそれ程の勇氣なければ、徒惚何時までも徒惚にて、口へは尙更仕打にも見せられぬ初心な想が、終には内に痞へて元氣衰へ、眞逆に戀煩と云ふではなけれど、ハツキリとせぬ其人の朝夕の顔の色、出入の度々若やとわたしがお筆さんに裏問へば、些と時代だが可哀想と云ふ。

何うかしておやんなさい、と岸本さんに眞劍に云へば、それ程でもありませんまい、とて十が十は眞にせねど、勿論憎くは思つてゐぬ返事、此の界限で評判の娘に、これ程までに想はれた岸本さんは男冥利、人間何でも様子よくしたきものなり。

お菊さんは是非もなし、岸本さんは手馴の仕事、兎に角何うにか爲さうなもの、と此方で思ふには似ぬ自烈たさ、相手に因るか、此頃臆病になつたのか。

逢つて四五度、電話の序に二三度、岸本さんに此の事を云へど少しも煮切らず、餘り話が旨過ぎるなどと、冗談口の中に三日と経ち五日と経ち、櫻咲く四月の末ともなつた頃、不圖お菊さんの姿見えなくなり、わたしの行つた二度が二度三度が三度、噂さへも家の人からは出ぬ可怪さに、親類へとばかり云つてゐるお筆さんに、根掘り葉掘り尋ねて見れば、然る病院の院長さんの持物にされたと云つて、堅い口止。

得心が無理往生か、山吹の内輪の委細は知らねど、云はど初恋のお菊さんの料簡は何うして何うなつたものか、岸本さんの遠慮が過ぎたか、用心が當つたか、其後岸本さん山吹へ影も見せず、お菊さんは時々自家へ來ると云ふ。

想ふとは何様な事、惚れるとは何様なもの、男なり女なりの色師へこれは何ひ事。

われ／＼社會には斯様な話も往々あるなり。

おもひすぎし

土地で名代の會席の老舗、美味い物屋と云はれてゐる梅村に、貴娘のお染さんとといふ一人つ兒、六歳の時から女主のお喜多さんに育てられて、乳母日傘の仰山こそなけれ、諸藝一通りを仕込まれ、體にも容色にも磨きを掛けた十五年、今年二十歳の色盛り、面長の瘦形は當世でない代り、老舗に居さうな江戸前のスツキリした風俗、界限での評判は申すまでもない事。

八十越してまだ達者の阿父さん與助さんの嚴さを其儘に、お喜多さん齡はと云へば方纒と五十そこ／＼でありながら、衛生料理染みた今風を強い禁物に

して、獸肉は自家の者の膳にさへ載せず、古格一遍、それも茶掛かつて通め
 かさぬを看板に商賣すれば、家作から客待遇、大一座などは勿論あらうやう
 もなく、偶には怖ろしい大通が見えるさうなれど、大抵は静かなお客様ばかり、
 出入る藝者にも金の腕輪を飾めたのは無いと云ふ。

爰に昔の人情本にありさうな談と云ふは、何かの參會の歸りに仲間四五人と
 御飯食べに寄つたがお馴染の抑にて、其後時折一人でも見えるやうになつ
 た富澤町の金巾問屋伊勢惣の若旦那、親旦那は惣兵衛とて代々名乗る暖簾名
 の其の惣の字を、總領の估券にしたる惣太郎さん、商業學校出の二十六、こ
 れとお染さんと何時か嬉くなつたのなり。

俗に云ふ小本向き、若旦那と娘、お染惣太郎も時代過ぎれど、此の若旦那内
 内遊びも知つてゐて、満更の初心でなく、家業柄の服装は堅くとも、帽子の
 滑革には打抜の横文字を附けて置く氣の新古折衷、學校時分の宴會にもお酌

人に随分チャホヤされた噂
 二十歳にはなつても、お染さんと云はうよりお染ちやんと云つた方が似合の
 色娘、鈴仙の緋の單衣に、黒と藍氣の腹合帯に緋の脊負揚、それで光明取り
 のある藏前の帳場に一寸横坐りの、何やら書いてゐる様子を見ては、昔のお
 染も氣障臭き今の世に、丁度頃合の下町仕立、三年前に心臓病で入院した時、
 ソップ牛乳の飲めるが不思議と笑はれた事もあり。

然れば見るからの堅氣、婦人雜誌が藏二階の机にあるも異なもの、と云つて
 好いやら悪いやら、高等小學は優等で卒業したのが女主人の自慢の一
 懐紙、燕口の味こそ御存知なけれ、船越惣太郎さん流石日本橋の大店育ち、
 浴衣の下に襟付と肌着と襦袢を二枚着るやうな女學生に戀を仕掛け、資本入
 らずに手を握つて用を足す熱烈とやら云ふのを好かず、念の入つた徒惚の幾
 月かに、一心通じてお染さんの動悸、今時馬鹿だと笑ふは眞の戀知らず、女

の兒何時か反對に悒々となつたを、女中頭のお安さんと云ふ三十越した大年増が、早くも見て取つて可哀想から粹な取持、或夕暮奥二階の小座敷で忙い首尾のめでたしく、松の葉越しのお月様は何う御覽ぢやツたやら。
 奥座敷で三度に一度の果敢い逢瀬、芝居惣見の一夜を一寸抜参りに、伊勢惣の若旦那の腕に凭れた事もある由なれど、お染さんの體なかく自由が利かず、お供なしでは外へ出られず、肝腎のお安さんは取締の大役あればお供には附かれず、然ればと云つて、家にゐては客の座敷へなど表立つて出られさうな事もなし、叶はぬ戀の切なさよりは、此の戀叶ひての男女の苦さ、お安さんも後悔するばかり。
 数は逢はねど多くの人目、逢ひ初めてより二月経つたか経たぬ間に、此事早くも女主に知れて苦勞の種、それが又お染さんの苦と萌え出でよ、遂にわたしの話種。

夜も更けて二時過ぎ、女主人側なるお染さんの目の覺めてゐるを幸と呼びし、改まつて話があると云ふ。
 若やと胸を押へながら聞けば、時世時節は仕方なく、鶴料理に紳士豪傑を呼ぶ家の繁昌に蹴壓されて、向島の別荘を其儘待合の寒香亭も、今は金の擔保になつて受戻しの覺束なさ云ふまでもなく、百幾十年引續き、錦繪にまで出た事のある此の梅村の店さへも、來ん春までが氣懸かりの九死一生、それを救つてやらうとあるは、大澤銀行の頭取大澤子爵、古くからの御最員の深切づくつと、二つには娘所望の咏と歌、下の句が解けたなら、當人は寒香亭に住ませ、梅村の整理も即刻との相談、富澤町さんとの仲ぐらゐるは、現在親のわたしが見て見ぬ振の首尾も繕はう、それを切ての勘辨に何卒得心してくれと、義理ある親が色蒼褪めて、終には泣いての頼み事、お染さんの心の中。
 銀行頭取子爵様のお望み、而も殿様の齡はまだ四十七八、意氣な道樂者、世

間並の今時の娘氣質から云へば、願つてもなき仕合、行く先々の目的次第では、別荘の一つぐらゐる此方から持参にしてもお世話を戴く筈なれど、世馴れず男馴れぬお染さんには即答もなりかねて、阿母さんの割つつ口説いつを、夜の白むまで聞き放しのそれ限り、それでもお喜多さんは年の功商賣功、終に唯一言、若旦那の事もよく考へて御覽よと。

船越さんの名を出された上は、モウこれまでと、女氣は寧ろ強く、堅氣の家けんめいの曉方と思ふ時刻に電話を掛けて、若旦那に急々との呼出し、お染さん一生懸命。

此の夜若旦那の心配さうに來たを、其處は宜くお安さんの計らひ、奥の例の座敷にてお染さんに逢はせながらも冗談口、お染さん、確りして下さいよ、女主人にわたしが異う云はれましたよと。

斯うなッては却々人目も怖からず、お染さん今日曉方の一伍二件を話し、何

うなるでせうと涙を落せば、若旦那も元氣なく、それ程の大事、生易い金で濟む筈なれば、われくの智慧分別に及ばぬは知れた話、わたしは決然と思ひ切らう、縁があつたら此の儘で一生過ぎる事もあるまい、別れたくなくともあつても、義理や理窟の沙汰でなし、實も不實も今此の際には要らぬ言葉と、顔に曇は見えながら、何うにもならぬ切迫詰めに覺悟の男氣、愚痴も怨も存分にも思つてゐた身には本意なく、あなたはそれで氣が濟むのと情なれば、見て見ぬ振で逢はしてやると云つてお呉の阿母さんの一言で、わたしは何も彼も斷念めると、日頃の優さには似ぬ思ひ切り、お染さんは涙も止まり、良少時黙つて居た末、あたし斷ります。

わたしの入れ智慧と思はれるが辛いと、種々に船越さんが説得しても、お染さん返事をせず、あなたとの事を枷にしての今度の相談、それを斷つて不孝になるなら不孝になりませう、薄暗い家では育ちましたが、戀とはそんな話

まらない、弱い果敢いものでせうか、あたしには然うは思へませんと肩を嘔む。

互の話行詰まりては坐も白け、未練同志の未練未練、果てしは無しとお安さんの口出しに、言ふだけの事繰返してもまだ言残る數々を胸に納めて、此の夜は此の儘別れしが、次の日お安さんより船越さんへの電話あり、當分は遠ざかつてるるを承知の返事、云はれずとも固より合點のこと。

其後二週間ばかりして、船越さんへ又お安さんの聲で電話、先日は一旦お見合せを願ひましたが、段々話の都合もよきゆるゑ、御當人より委い事を申す筈、是非々々今夜向島の家の方へとの呼出し。

考へに能はぬ一條、爲ん方もなくて立派に云つては別れしものよ、其後何の便りもなく、十幾日を過ぎたる今、都合好く行きしに就いて話があると云はれては、若旦那那落着いてゐられず、初心らしくも身綺麗にして、夏の日の暮

るよを遅しと、寒香亭の門を潜れば、お安さんが庭下駄穿きで其處に居合はせ、南の縁先を廻つて池添ひの六疊の離れへ通す、蚊遣の煙。飛石傳ひ、草履穿きに駈けて來たはお染さん、美く身仕舞した體を押當てるやうにして船越さんの側に坐り、あなたとばかり膝に手の、差合知らぬ歡喜なり。

萬事はお安さん一人しての取賄、儲一口と酒肴は出ても、二人の間には大事の話。

お染さんの云ふを聞けば、大澤さんの話は決然斷つたれど、豫々の御最眞に縋つて銀行の方から融通して貰ひ、此の待合も漸く取止め、店の方も追々に始末が附く筈、何卒安心して今まで通り逢つて下さいと、好都合とは聞いて來たれど結構盡め、船越さん餘りの案内に却つて腑に落ちぬ聞糺し。

それも何うやら得心して、蚊帳の中なる物語に、若し又家の都合があつて、

子爵の世話にならねば濟まぬやうになつたら、其の様に逢つてくれ、一旦綺麗に別れやうと云ひ、現に今日来るまでも断念めてはるたに違ひなければ、斯うして逢へば耻かしいが未練が出て、阿母さんの云つてくれた詞に甘え、無理なやうだが逢ひ逢ひたい、わたしの心に變りはない、退引ならぬ破滅になれば、大澤さんの世話になるは承知、包まず明かしてサツバリと得心さして貰ひたいと、船越さん染々と優く頼む。

お染さんは事も無氣に、そのやうな事は決してさせぬ、萬々一にも有つたらば、第一に打明けて堪忍して貰ひますと、爽な返答、十一時近くに歸つて行つた船越さんの浮きくした顔の色、無理でなし無理でなし。

二週間の苦は苦でなくて、結句逢つての今夜からが大きな苦勞、馬鹿らしい程氣になるにぞ、笑はれたらその時と、船越さん次の晩又向島へと他愛なく、當分爰の手入れ中お安と二人逗留と云つたに違ひはあるまいと、吾妻橋から

堤を歩いて行く向ふより、緩やかに来る自動車には金々たるお染さんと大澤子爵、暫らく立竝んだ船越さんは、悄悄と元來し途へ。

明くる日男の表書にてお染さんより船越さんへ手紙、あれには種々譯のある事と、切ない始終の概略を書き列ね、今夜是非にと繰返し繰返し記したるを、幾度か讀みはしたものと、船越さん行きもせず返事も出さず、一日と經ち三日五日と日は過ぐるまゝ、而して其のまゝ先方よりも音信なく、何うなる末かと思ひし程の二人が仲はつひこれ限り。

乳 房

梅村の娘お染さん、此の人をと思ひ込んだる伊勢惣の若旦那に、悪い心地をさせまいとの案じ過ぎしが仇となり、大澤子爵との泣きの涙の仲を、唯一筋に怨まれて、心の底を繰返し繰返し書きたる文も片便、音沙汰なければ心の怯から二度目の詫も云つては遣れず、これが浮世の切ない慣、何時かは経緯の知れる事もと、女中のお安さんが氣休めを、氣休めにして一時を堪へ、親の爲家の爲、商人の暖簾の恥を救ひしと思ふばかりを慰めに、向島の別荘寒香亭に面白からぬ朝な夕な、二十歳になつての初戀の破れ、金ほど憎いものは無し。

は無し。

八十越した與助さん、五十の聲のお喜多さん、お染さんの心一つに美味い物屋の名を取留め、ホツと息は吐いたるものよ、不義理の有りだけが片付きしと云ふではなし、眉に火の附く急場を免れし一時凌ぎ、尤も其後幾度か子爵の世話にもなつたれど、曲り掛けたる身代の、整理と云ふ事容易でなく、内所の噂自然と世間へ聞ゆれば、折角の老舗もモウ没落かと、要らぬ深切の氣の毒がりが界限に煩くて、向き掛けた客の足も他所へ外れ行く運の盡き、主人親子は夜も寝られず。

實の娘でもある事か、六歳から育てた義理ある仲、されば學校なり遊藝なりも氣を入れて女一通りは仕込んだと思ふ彼のお染、妙齢になつても浮いた評判一つ立たず、知る程の人の褒め者となつて来たを自慢に、立派な婿をと心掛けてゐた効もなく、可哀想に折角の戀を捨てさせた上に慾得づくから人の

玩弄、しかも現在の其の浮氣を親が吐りもされぬ始末は何事と、世の中を怨み身で身を責める愚痴無念、お喜多さん終には何うでもなれの捨鉢氣味、娘を子爵に任せたが、今では結句無駄なやうに、自烈るも無理とは云ひ退けられず。

思ひ内にあれば色外とやら、肝腎のお染さんの心浮かず、お喜多さんの焦慮も日増しに募るを、子爵も何時か氣に掛けて、偶には角のある事も云へば、それが又毒になつて、母子が愚痴の種となり、今まで人に見蔑られた覺えな梅村の主人娘が、多寡の知れたる金ゆゑに、恩知らず義理知らずと云はれぬばかりの常擦りに、唾も返せぬ口惜さ、おのれヤレ三年前の梅村であらばと、母親が泣けば子更尙更の憂き苦勞、庭の秋草色濃き頃のお染さんの淋さ、側にゐるお安さんも、覺えの技倆を何う爲やうもなし。

子爵の不機嫌漸く重なり、七日に一度の訪れもなくなりたれど、女の嗜捨て

られぬは粧り飾り、夕風冷えて湯上りの頸に汗せぬ鏡臺前、お染さん薄すらと白くして、少し低めの島田の鬚も鬢も艶々と梳き終り、胸のあたりの白粉を押さうとて、濡手拭を取りながら、不圖目に留まりし我が乳房、妙齡になれば女の常習の肌見らるゝ恥かしさの、中にも分けて此の胸の膨らみ、それを隠さう術もなく、細りとした指頭に、又悪戯な肩に、許せし折の嬉さも見果てぬ夢の覺め心地、初秋の風の前に肌を曝して、誰が爲の身嗜、行く行く此の乳の張るやうにもなつたらばと、恥かしかりしも、今ではホンの戯れ事、大人しい顔した若旦那の、何處で覺えての悪戯と身を蹙めてから、偕其の後の逢瀬は、片手の指を折るにも足りず、爰の座敷で一度の首尾が生涯の別離にならうとは、人の運と云ふもの斯うも果敢いものか、此の肌此の胸此の乳房、淋しいは今の身の上と、お染さん我が乳房を我が兩の手に抱き緊めて齒を噛みつ身を顛はせつ、見詰むる鏡の裡にも涙、汚れし化粧が切ても

心行りともなつたやら。
 虫の音繁き此の夜の中、お染さん堪へ兼て細々と文認め、富澤町の伊勢惣へ
 と翌朝早く郵便にて出したるを、惣太郎さんは何んと見てぞ、それには何ん
 と書かれてぞ。

黒 髪

待合花川の古いお客土橋さん、色は白い方なれど、顔立キリツとして、何方
 かと云へば苦味走つた、年増好きのする好い男、齡は三十前後なるべし、會
 社員にて獨身、親御は揃つてまだ御壯健、可なりの御身代の由。

相續人のお兄いさんは別家して、裁判官では有名なお人、自分は次男の身輕
 氣輕、兩親を過ごす世話のあらうではなし、奥さんは貰つてから三年経つや
 経たずに死別のそれからと云ふもの、土橋さん以前通りのだらく遊興、近
 い頃でのお馴染は小房さん。

われ／＼仲間の口から云ふは如何なれど、此の小房さん餘り好い藝者衆でなし、色白にて中肉中脊丈、常磐津と踊が可なりに出て来て愛嬌もあるゆゑ、一體ならば相應な顔でゐられる處なれど、甲府の柳町とやらから住替へて来た家が今の初音家、土地では餘り榮えぬ看板なれば、小房さんも自然伸せず、出てより二年の餘にもなれど、何りもバツとせぬは氣の毒、と思ふ中にも人の運、斯うした事になつたと云ふを書いて置く。

土橋さんが宴會の歸り、十一時頃になつて花川へ寄り、太く酔つたゆゑ寢かしてくれ、介抱人は誰でも關はぬ、知らぬ人が好い、餘計なお世辭など云はず、黙つて靜にしてゐて呉さうなのがあつたら頼む、と女主人への註文。惚つほくて飽きッほい土橋さんには、女主人が心得てゐて呼ぶ程の深いのも此時恰ど無かつたのなるべし、何んでも一旦言出した通りにせねば納まらぬ氣質を萬々承知とて、花川の帳場で一寸評議の末、何時も頼まれてゐる彼の妓

が大人しさうで好いかも知れぬ、相手が何も彼も合點の土橋さん、斯う云ふ時に呼んで見てやらうと、聘けたのが小房さん。

敲分ではあつたさうなれど、贅澤の云つてゐられる體でなし、十二時間近を小房さん直ぐに来て、そのまゝの介抱役。

明くる日は日曜、土橋さん緩りと落着き、小房さんを相手に迎酒とて飲み直し、下の廊下で女主人が一寸引留めて、ホンのお間に合はせと思つてと云つた時には、何アに結構さと例の調子。

月曜の晩宵から小房さんと呼んで、冗談のやうに、何かお聞かせなと云ふと、何も出来ませんがと耻づかしさうに云ひながらも、正直に三絃を持込んで常磐津を一齣、聲なら節なら音メなら、大抵のヨタ姐さん蹴と云ふ始末に、土橋さん滅法氣に入つて了ひ、女主人や女中を捕へて、これに限るこれに極めると大御機嫌、九時頃箱屋が来た時は、お帳場で計らう、小房さんも居据る、

土橋さん好い心地に十二時過ぎまで。

土曜日に泊まッて日曜まで遊び、月曜に来て水曜木曜と立て続けの御執心、持病が起りましたねと女主さんが笑ふと、土橋さんの言種が斯う、大人しくッて實に好い、第一お世辭を云はない、無駄を云はない、宛然素人だ、それでゐて人間が伶俐だ、藝だッて相應に出来る、惚たよと。

お株を云つてゐらッしやると女中は笑ひ出したれど、人は好きん、大人しいが全く氣に入つてか、道樂者の土橋さん悉皆と小房一點張になり、房ウ公房ウ公と大した可愛がり様、何うも一週間に三四度宛もお呼びになッて、それがモウ三月も續くとは、餘り不思議過ぎますが、あの可愛い口元でニコニコする處が、そんなにも御意に入りましたかねエ、と女主が聞くと、土橋さん嬉さうな顔をしながら、何が氣に入つたッて、彼奴唯の一度も又來てくれと云つた事がないと、實に何方も何方なり。

云ふまでもなく、土橋さんは小房さんを遊ばしてやりながら、遊ばして貰つてゐるのなれど、それにしてもお互の氣が合つたとても云ふのにや、地道の色合濃厚と、時折は寧ろ馬鹿々々しい程の座敷の有様、餘り女の方が落ちてゐる土橋さん見つともないなどよ、最初は下目に小房さんを見てゐた若い女中衆が、此頃は氣が悪いと堪らながるはよくくの仲好、女主は小房さんを仕合者だと云ふ。

年末に押詰まッた四月目の頃から、月に五六度六七度のお座敷とはなつたれど、土橋さん大分眞面目と見えて、小房さんの來ぬ時とても外の藝者は座敷ばかりの忌味なし、小房さんも随分無理をしても花川へは駈付ける勤め力、春は相應に土橋さん氣を屈かしてやつたやう。

處が此の一月、土橋さんお友達五六人と二見ヶ浦へ初日の出を拜みに行くと旅行した祟、風邪を太く引き込んで、七種過ぎて床を上げられず、花川

の家の者と小房さんとの聲を一二度電話で聞いた限りの寢正月、小房さんの方では頻々花川へ訊ねて心配らしい面色。

或時女主人さん、小房さんに向つて、あちらの御病氣も御病氣だが、怏々してお前さんも煩はないやうにおしよと云ふと、エ、とばかり莞爾する、それともお前さんそれ程には惚てもゐないのと手軽く聞けば、あたしなんぞが幾ら想つて見た處で、と張合のない返答に女主人は面白からず、立派な藝者衆に散散騒がれた彼方だがねエと一服喫へば、だからあたし有難いと思つて、不動様へ日参してゐますのよと云ふ。

あの人は何うかしてゐるよ、と小房さんの歸つた後で、女主人さんと女中との噂は何うも好い方でなし、土橋さんも何うかしてゐらッしやる、とは女中同志の蔭口。

一昨日から出勤したと土橋さん十五日の日に花川へ来て、小房さんを聘ける

と、一時間ばかりして貰つて来る、一同がお見舞の口上初春の御挨拶何や彼やの取交せてが濟んで、偕此の夜はアツサリ、明くる晩は緩り、それに此の時の小房さん、別に何う此方から勤めやうでもない氣色に、花川の家中が些と納まらず、中には小房さんを悪く云ふ、土橋さんを甘く見る、二人の評判大分よくなきどん詰まりが、忌に堅氣の情交のやうで氣が悪かつたのも買冠りさと。

人の噂を知つてか知らずか、二人はそのまゝ遠退きもせず深くもならず、ただらと逢つて二月も過ぎて三月の初の一夜、小房さんのシンミリした談。實家は甲府、親は塗物商人、本名は生田とよ、齡は十九、とこれだけ聞いてゐた土橋さんには初耳の、其の小房さんの身の上を聞けば、十七になつたら貰はれて行く筈であつた從兄の家も同商賣、兩家助けつ助けられつして行く中に、自分の方は身代傾き、爲ん方盡きて十六の時、親の爲家の爲の稼業怨

みとは思はぬと云つてくれたる男心の嬉さを力に、土地で藝者の仲間入り、鼓太鼓の稽古に涙を流して暮らす中、増木と云ふ其の従兄の家も亦左前の不幸となつて、此の縁成就の望遠きに、寧ろその事と東京へ住替へて僅ながらも先方の家へ貢ぎ、體は賣つても心の操と固く守つて滿三年、誰が情にも男振にも氣を逸らさず、座敷大事お客大事とのみ勤めて来た今となつて、起つたは廢業談、實は主人と實家との間に先月から交渉のあつたが纏まって、伯父の小牧と云ふが急に一昨日上京して一切片付き、今夜限りの藝者稼業、又甲州の田舎者になります、と思ひ掛けぬ一伍一什。

然う云ふ身の上とは少しも知らなかつたが、素人になつて親の家へ歸れるとは何より結構、それで縁談は、と土橋さんが尋ねれば、お蔭で兩方の家とも身上を持直し、今度出し合つての親許身受、歸つてから半年なり一年なりお針の稽古にでも通つて後、こんな體でも貰つてもらふ約束と小房さんの返答、

それなら今夜がお別れか、と云ふ膝に取付いて、伯父さんは親類の家に宿を取つて、五六日は東京見物、その間は用のない體、お煩くとも然うく長い事では無し、切て出立前まで逢ひ續けて、と甘えて云つた心の中、土橋さんは何う聞いてぞ。

何や彼や用もあらうと云ふを押止めて小房さん、あなたが御出勤の間、又お宅へお歸りになつた後、一人法師になつた時に、初音家の方の用事も伯父の方の相談事も濟ませます、體のお明きの間隙々々には、何卒此家へ来て逢つて下さい、又何時お目に掛かれるか知れぬ身の上、東京にゐてモウ明日から誰に逢ひたい人もなし、と土橋さんの體に掛けた手を離さず、染々とした頼み、土橋さんも何とは無しに名残惜く、それならば増木さんへ渡すまでは己の女房、爰に落着いてゐて用達をするが好い、多寡が四五日、己も爰から出勤する、と締め寄すれば獅嚙付いての喜び、何んと云つたら好い仲にや。

此の夜は別れて更めての次の日、土橋さんが會社からの歸り掛け、花川へ寄つて見れば、小房さん淡紅色の手絡で小意氣な丸髷、土橋豊子と云はぬばかりにして、桐桐の火鉢に湯沸を掛けてチンと控へてゐる。

ヤアと云つた土橋さん、道樂者だけに結句此の心意氣を買込んだ御機嫌、迷はせ了ひに罪の深い事をするねと笑ふと、今まで可愛がって戴き放しの氣が濟まず、自分だけの心行りに丸髷に結びました、と作り飾らぬ女氣の美さ、これには如何な腕好しも刃向かはれず、酷い目に遭はされるものだとばかり、男の子好き好んで甘くなる。

花川から勤め先へ通ふを、小房さん毎日門口に送迎して五日、六日目に土橋さんが戻つて見れば、彼の親類の家へ行つたとて丸髷はお留守、座蒲團二つに唯一人、女中に擲擲はれてゐる處へ、服装を悉皆取替へて來た小房さん、明後日の午後の汽車で愈出立と極まりましたと云ふ。

此處の家で二度まで丸髷の世話になつた髮結さんに、其の髷になつてから七日目の右の翌日、今度は人柄な島田に直して貰つてゐる小房さんを、片腕立てた手枕に寝轉んで見てゐた土橋さん、冗談口一つ利かず黙つてゐて、やがて小房さんから心付を遣らして髮結さんを歸して後、永らくお前の島田も見だが、然う素人染みると尙よく似合ふ、それを丸髷に結び直したら、最早それ限りの身の納まり、二度と再び島田などに結はぬやうの辛抱が肝腎、六日の間の丸髷はわたしの眼の底へ貰つて置く、と笑へば小房さんも嬉さうに領いて、それから風呂の仲の好き、近頃右左云つてゐた花川の家の人達も、これには何うやら變な氣になつたとの事。

此の夜の様子、曉の別離までは細々知らうやうもなし、男女が花川に籠城しての八日目の朝、女主が氣を注げての尾頭附に一杯飲んで、偕愈の別れ際、小房さん懇慫に兩手を突いて、土橋さんに永々最眞の禮を述べ、女主初

め臺所の女中にまで一々の暇乞、而して女中達には何やら各自に置土産、お己には何も呉ないのかと土橋さんが所在無氣に云つた時、人目を避けて帯の間から半紙に包んだる物取出だし、笑はないでと云ふと其儘、土橋さんの袂へそれを押込んだが別離、足早に二階の座敷から門口へ。

行く人残る人、互の挨拶愛嬌笑ひ、女中達の何んの彼のを聞捨てに座敷へ戻つた土橋さん、誰も来ぬ間と袂の物出して見れば、八日前の日附を裏に書いて、その隅に小さく「とよ」と認た丸鬚の小房の寫真と、その寫真の主が常日頃左の無名指に簞めてゐたダイヤ入の細指環、土橋さんの此時の心地、われわれ女の身には聞いて見たし。

別れてから三日目、花川へ土橋さん宛の手紙甲府より届きたれど、生田とよとあるばかり、差出人の住所なければ、電話で呼んだ土橋さんに、返事をお遣りになる先は分かッてるるのですか、と女主が聞くと掉首を振り、言はな

いから、聞きもしなかつた、と手紙は封のまゝ袂の中。
 今日急ぐ、些と家を明け過ぎた後だから、と土橋さんお帳場限り、擲掬はれて歸つて、それから又時々花川へは見えながら、つひぞ見せぬは彼の指環、纖麗な指に簞まらぬではあるまじ、指環嫌として偕此の房ウ公の遺物の二品、土橋さんとは何うなる縁か。

行　く　春

談話の中の何處やらに訛はあれど、面長に姿もスツとしたる三十七八の年増、眼元の愛嬌に半分物を云はせながら食卓の横に坐つて相手をしてゐる、これは此の待合寶屋の女將お高とて、好きと連添つた運の好い商賣上り、少しばかりの肴を片寄せて茶卓に肱を掛け、片手に巻煙草を喫んでゐる客は、年の頃三十五六、一つ紺の羽織着物に兵兒帯を締めた會社員風、飲めぬ酒に微酔となつて倦怠さうな状。

客「少し繋ぎ切れなくなつて來たね。」高「もう直ぐですから、我慢して一杯召

上れよ。」客「此上酔うと、何うもね、御存知の譯だから。」高「大丈夫ですよ、だから氣を換へて子供にしたんぢやありませんか、そりやア本當に綺麗ですの。」客「何だか知れたもんぢやない、何時だつて君の仲人口の心當になつた例がないんだから。」高「何時も心當にならないなんて、春の字なんざ何うなすつたの、五六度もお呼びなすつたぢやありませんか。」客「十人に一人ぐらゐは有る方が當然だアね。」高「あんな憎らしい。」

女主が優しい聲で笑へば男も笑ひ、

客「だけど本當に代物は確かい、可愛い半玉が現れる事だと思つて、倦怠い眼を見張つてゐると、童子格子の友禪か何かで、雲突くばかりの大玉が現れるんぢやないか、女主さんと來ちやア、實に危険だからね。」高「ホ、そんな友禪を着た大玉なんて。」客「笑ひ事つちやないよ。」高「大丈夫ですよ、幾ら爰等の土地だつて、あなた、第一流の飛切で、ね、申上げた通りの相場

ですもの、不見點ぢやありやアしませんわ。」客「それは懇々と承つたがね。」高「初めに世話をした關係があるもんですから、それに相手があなたで居らッしやるから。」客「偉いもんだな、處で何うでせう女主人さん。」高「又そんなお世辭を仰有る。」客「本當に斯様な綺麗な人を家に置いて、好く旅行ばかりしてゐられるもんだ、亭主は實に罰中りだね。」高「それでもあなたのやうに罪は作りませんよ。」客「何うでせうか。」

ト云ひながらも、酔醒め際か生欠。

高「ア、來たらしう御坐いますよ。」客「物凄じき大玉が現れるかな。」高「そりやア姿態は些と大きく御坐いますよ、明日のお朔日から一本になるんですか。」客「エツ、そんな事だらうと思つた、何うも今はの際になつて。」高「柄は大きくツても、十六で、そりやア可愛いんですの。」

ト話の中廊下に足音、障子を明けて仇氣なく挨拶するは、噂の半玉香蝶、第

二流の土地にはあれど指折の看板の家の賣つ妓、服装も容色も思つた倍の美さに、

客「こりやア綺麗だ。」高「如何です。」客「一言も御坐いません。」高「本當に美しいもんでせう、此の子が貰へるなんて、あなたはお仕合ですよ。」客「何しろ子供は綺麗だ。」高「これで今まで婆アで繋いでゐたお埋合せが附いたでせう。」客「あなたの事は格別だがね。」高「お酌でも、と云ふ處だけど、此方は些とも飲らないんだから、随分お待ちなさるのにもお困りだつたのよ。」香「濟みません。」高「それでも早く貰へた中ね。」香「これで一生懸命急いだんのです、幾度も蹴躓いたわ。」客「ウーム。」

ト感心して聞きながら見てゐる、女主人は笑ひながら、

高「何うなすつたの。」客「何方を見ても美しい。」香「アラ忌だ。」高「お前さんは美くないかも知れないけど、わたしは美しいんだよ。」香「アラ女主人さん。」

高「何。」香「何つて、そんな意で云つたんぢやなくってよ。」客「よし、良くない婆アだ、誰にでも氣を揉ませやがる。」

ト女主の顔を態と見れば、笑つてゐる。

香「あなた堪忍して頂戴な。」客「わたしに謝るのは可笑いな。」香「フ、何だツて好いわよ。」客「明日つから島田に結ふんだね。」香「島田には何度も結つたわ。」客「大失策だ、ぢやア一本になるんだね。」高「柄があるから、嗤好いでせう、あなた何卒ね。」香「何卒。」客「ウム。」高「お大盡様です、蝶ちやん、もう此方飲らないんだから、お煎茶でも持つて来て上げて下さいな、お澤がゐるでせうから。」香「エ、。」

ト立つて行く後、

高「幾ら難題家のあなたでも、あれなら好いでせう。」客「先方が何うだか。」高「何うも悉皆仇氣なくなつてお了ひなすつたのね。」客「脆いもんです。」

高「ぢやア好在んすね。」

ト出て行くお高、頓て茶道具を持つて入来るは三十格構の女中お澤。

澤「彼方へ行つて召上がれな。」客「好いのかい。」澤「其處は其處次第でさアね、今時の、あなた。」客「甚だ簡単に解決しちやつたね。」澤「あなたなら先方から願ひますよ。」客「と先ア實は思つても居るんだがね。」澤「此處で召上がる。」客「一杯注いで貰はう。」澤「今夜は本當にお酔ひなすつたのね。」客「女主人のお酌なもの。」澤「あなた、七兩二分あるんですか。」客「石部のお金さんだ、仕方がねエ君で間に合はして置け。」澤「眞つ平、あなた見たいな性悪に係合つて堪るもんですか。」客「失禮な事を云ふな、こんな眞面目な人間を捉へて。」澤「さう、眞面目ではゐらッしやるわね、だけど遊び草臥てゐらッしやるんだから。」客「女に渴へてゐるんだ。」澤「ホ、サア、それぢやア彼方へ行きませう。」客「好いかい。」澤「エ、もう整然と。」

二階の奥の六疊、電燈の光薄絹に霞みて、眩からぬほどの柔かさ、お澤は宜くあつて下へ行く、頓て階子のあたりで行違ひし氣勢して、衣の音靜に入來る香蝶。

香「アラもう。」客「お前が逃けて歸つたつて云ふから、斷念めて。」香「知らないわ。」

ト坐つた前の巻煙草を袋ぐるみ扱る。

客「煙草を喫むの。」香「幾ら稽古しても喫めないのよ。」客「煙草を喫んでも、鼻から出すのはお廢し。」香「アラ、だつてそれでなくツちや、本當に美味くないんぢやないの。」客「旨くならない方が好いさ。」香「だけど、藝妓衆で煙草が喫めない、何だか變だわ。」客「明日つから香蝶さん姐さんだね。」香「アラ忌だ、香蝶さん姐さんだなんて。」客「ぢや何て云ふの。」香「知らないわよ。」客「そんな愛想盡かしを云はないで、早くお前も樂におなりな。」香「エ、あ

なた、明日か明後日來て頂戴な。」客「ウム、姐さんになつた處を見に來やう、可愛らしい藝妓が出来るだらう。」香「さうでないわ、圖體が大きいから必と小憎らしいツて。」客「誰がそんな事を。」香「家で姐さん達が云ふのよ。」客「旨く云ふぜ。」香「本當よ。」客「それでも一本になるのは嬉しいだらう。」香「あなし何にも出来ないんですもの。」客「だつてお稽古はしてゐるんだらう。」香「エ、そりやア疾うからやつてゐるわ。」客「お酌さんでゐる方が氣樂で好いだらう。」香「然うね、ですけど、然うでもないわ。」

香蝶は煙草を一本拔出し火を點けて、煙さうな顔をして吹かす。

客「先ア此方へ來てお話しな。」香「エ、。」

煙草を惜氣もなく灰皿に捻付けて、俣臙の室の内に咲くは友禪の藤牡丹、それを熟と男は視ながら心の中。

「千菓子のやうにしてゐたのも今日限り、夜が明けると大人になつて、此家

の女主人のやうになつて、綺麗は綺麗なりに段々と末枯れて行くのか、此の女の最初の若さ美さも、あの簪、あの櫛、あの着物と一緒に、間もなく生涯の別離となるのだ。」

ト思へば果敢き花の色香、二度來ぬ春の名残の小袖諸共に、女が一生の中の移り更へを目に見るやうに淋しくて。

香「あなた、何を考へてゐらッしやるの。」

ト覗く香蝶の耳に小聲、

客「今夜は寒いよ。」

香蝶は片袖攔みながらに振返りしが、隙間洩れ來る風もなし。

ひと夜

料理屋登美田の二階座敷の取付、階子を上り切つた廊下の左の小間に、二間四枚の眞ん中の障子を四五尺兩方へ明けて、白襟の藝妓六七人と半玉五六人、小聲ながらにゴヤ／＼と話してゐる、處へ階子から上つて來た三十一寸の色いろの浅黒い男おとこ、右の方へ曲らうとして振向くと、

「レエさん。」

ト座敷の内から素人のやうな聲を掛ける、男は障子の開いてゐる處へ行き、黒羽二重三紋の羽織の裾を無雜作に引つ攔んで、茶字の袴を穿いた腰に巻付

けながら、片膝立てた横坐りに闕の上に落着いて、

「モウ大分お揃ひだね。」

ト見廻せば、電燈の灯の下に押並んだる大小の連中、それ／＼に會釋する、聲を掛けた藝妓柳家のお糸、面長の三十格構、灰吹に吸殻をトンと敲いて、キリツとした眼に持味の愛嬌笑ひ、

「忙しいでせう。」

ト云へば、

「面倒臭いな、番毎申し附かるんだけど、幹事なんかするもんぢやねエ。」

ト云ひく、巻煙草の袋から一本出すを、お糸は黙つて取つて火を點けて渡し、而して煙草盆を傍へ押出し、

「今夜も亦呼ばないんだね。」

ト小聲になつて蕪雜な口の利きやう。

「幹事をしてゐて、手前の狎妓が呼ばれるものか。」「何故然う潔癖なんだらう、人を招待したつて、自分の持物を知らん面で側へ置くのが流行る世の中だのに。」「然うまで逢ひたがりやア何うするんだらう。」「女形が喜ぶのさ。」

「覺えがあるの。」

ト優しい言ひ様をして、笑顔になつた口元の色氣、此の男の身上なるべし、偕此のレエさんと呼ぶると今夜の宴會の幹事は、東洋銀行の腕利き清水とて、働も遊も人一倍の、身は持てよも世帯は持たず、初めて貰つた女房に死なれてから、今以て其儘の獨身、兩親は固より重役達までが兎や角と心配すれど、當人は唯フラ／＼としてゐるなり、お糸は幾分前へ出たかと思ふ程に一膝揺つて、

「三十にもなりやア、一度や二度は覺えもあらうさ、本當に先刻も愚痴を云つてゐましたよ。」「誰が。」「アレがさ、三吉が。」「大きな聲をしない。」

「他人様は居やアしない、皆御承知の仁ばかり。」
トは云つたものよ、少しは他へ遠慮の聲。

「歸りに何處かへ行かないか。」「わたしとかい。」「好いぢやねエか。」「だつて、今夜は三洲駄目だよ。」「兩個で行かうツてんだ、忌かい。」「詰まらないぢやないか、此の會が濟むと十時でせう、後の始末もするんでせう。」「夜道に日は暮れずさ、好い時候ぢやないか。」「本當にわれ／＼にや一番と云ふ時候でさアね、暑くなし寒くなし。」「八十八個所でも廻るか。」「もう本當に後生でも願ひませうよ。」「纔と三十になつたばかりで、老碌しちや困る。」「さうね、わたしより一つ上でさへ、三の字は彼の熱なんだから。」「詰まらねエ嬢がらせを云ふなよ、馬鹿々々しい。」「だつて今夜も熟々翻してゐましたぜ、世間並のを情人にしてゐたら、こんな我慢もさせられまいツて。」「だつて自分も賣れてゐるから好いやな。」「そりやアあなたが此の組合へお約束にしな

いから、お帳場で彼方へ聘けたんぢやありませんか。」「又例の領袖會議なんだらう。」「二次會となつた日にやア、天下の大政治家も何も零だねエ。」「時に此方の幹部さんは何うしたらう、七八人下廻りが來たツ限り、足が止まっちゃつた。」「此方の連中も何うしたらう。」

ト振返ると、然うねエ、遅いわねエと口々の合槌、話と煙草の煙の中から、お糸は少し摺れ出して、

「あなた逢つたかい。」「彼奴にか。」「ア、。」「逢ふもんか。」「わたし先刻お帳場の處で逢つたら、これから例の家へ引揚げるんだつて、苦い顔をしてゐたツけ。」「餘計な思入だ。」

ト口元の愛嬌、若い藝妓が横の方から染々と眺めてゐる。

「今夜は無事にお歸んなさいよ。」

ト屈んで煙草に火を點けてゐるお糸の膝の先を、清水は指先にて三つ四つ續

けて突付き、

「オイ、失かさないうで返事をおしよ、よ、歸りにお附合ひよ。」「弘法様かい。」「方々様でなくツても一軒で好い、それとも心當があるかい。」「無いさ。」「ぢや好いやな、お前と彼奴の中で何が始まるものか。」「馬鹿をお云ひなさんなよ。」「馬鹿なもんか、出掛けた先は差向エさ、機嫌よく遊んで呉りやア好いと、彼奴だつて内々思つてゐらア。」「本當に忌な稼業さね。」「面當な事を云ふない。」「妬いたり怨みツほい事を云つたり、アレの事となると何故然う愚痴になるだらう。」

ト簪を抜いて雁首の吸殻を掘りながらヒヨイと見ると、彼の若い妓は清水と顔を見合はせて莞爾してゐる。

「色魔、何處を見てゐるの。」「ヨウお出でよ。」「あの若いのに然う云ふの。」「ありやア御用提灯だ。」「何うだか。」

ト云ひつよも振向いて又見直す。

「コレお衆。」「そんな事は三吉に云つてお遣んなさい。」「ぢやアお衆さん。」「何さ。」「煩がツてるやがらア。」「だつて、困るわね、そんな事を云つて、智慧のない子に智慧を付けるやうな。」
ト段々に口の中。

「君は彼奴とそんな水つほい仲なのか。」「あなた今夜家へ歸らないの、エ。」
「そこどころはだ。」「先刻頼まれたんだよ、一人や二人必と怪いのもあるだらうからツて。」「そんなんぢやアねエ。」

ト熟とお衆を視てゐる、お衆は何か急に羞むやうな顔をしながら、
「間違があると、わたしがアレに申譯がないからね。」「申譯の出来る間違の爲やうもあるさ。」「お前さん。」「ウム。」「明日三洲に謝まつてくれるかい。」
「口惜がらしてやる。」「馬鹿ぢやんだね。」「好いやな、五分と五分だ。」

ト小聲に云つて顔を差付くれば、お衆はフ、と獨笑つて、煙管に一服詰めて見る、途端に御案内と云ふ女の聲、二三人一度に上つて來る氣配、清水はお衆の膝をチヨイと突いて立つ。

新梅曆

待合文の家の二階の奥の六疊、爰に結城づくめの三十格構の小作な男と四十位の色白な年増と、差向ひにて話をしてゐる、女は此家の女主お玉、男は永年の馴染客江本、女主の妹と小學校友達であつたのが縁の始まりとて、疾うから内輪の附合なり。

春とは名のみ雪催ひ、河岸に羽子突く女の聲も何時か止みて、今にもハラハラと來さうな寒さ、江本は立派な象嵌のある桐の手炙を引付けて、

江「何とも申譯がありませんが、年末の二十八日から、太く風邪を胃き込んで了ひましてね。」玉「然うでしたって、それはお店の仁に電話で伺ひましたけど、あの人の方へあなたが何とも云つてお遣んなさらないもんだから、元日早々大苦情でね、お仲も弱つたんですよ。」江「又飲んで居るんでせう。」玉「家へ来た時には、二三度とも其様に飲んぢやア居ませんでした。今日日は餘つ程確りなさらないと、思ひ切り苛められますよ。」江「お床上げのお祝に、苛められぢや堪りませんね。」

ト話の中に、年増の女中お仲、膳を出してそれから屠蘇を薦める。

仲「お一ッ。」玉「あなたに一番先へ祝つて戴かなかつたんで、何だか心地が悪くツて。」江「何うですか。」仲「又そんな憎まれ口をお利きなさる、數年來無い事だツて、女主さんが大變氣にしてお在なすツたんで御座いますよ、尙お一献如何、お温い方にしませうか。」玉「ア、其の方が好いだらう。」

ト云ふにお仲はお爛酒を取りに行く、江本は塗杯を女主に献して酌をしてやり、

江「随分幾度か爰のお屠蘇を頂戴しますね。」玉「妹も早くお目に掛かりたいツて、電話も二三度掛けて寄越しましたの。」江「嘸忙しいでせう。」玉「此の春は餘り然うでもないやうです、何と云つても若い者流行ですからね。」

ト此の時階段の下にてお仲の聲。

玉「来たんでせう。」江「食物が。」玉「女の子がですよ、そんなテレ隠しを云ふもんぢやありませんよ、些と逢はせずに置くと、直ぐ兩方が愚に返るんだから。」

ト少し壁の方へ寄る、お仲は食べる物とお銚子とを持って来る、後から藝妓お琴出の着物、年は二十五六、大して意氣と云ふでもなければ、垢抜のした薄手の中肉、眼鼻立バラリと、扮装に蹴られぬ縹緞のあでやかさ、嫺雅に手

を突いて、

琴「お目出たう。」

ト一言、女主の側に坐る。

仲「入らッしッたばかりで済みませんが、宜く。」

ト酌を頼んで出て行く後、

琴「お一つ召上れな、お寒いから。」玉「大禮服だけあッて、大層禮儀正しい

のね。」琴「禮服も最早面倒臭くッて、第一此の天秤棒がね。」

ト緋の袖口から白い手をグイと出して、笄を右左に動かす。

玉「お前さん、壊れるよ。」琴「見て下さる仁もなし、ア、。」

ト島田をグラ〜と揺振つて、

琴「禿の處が痛くッて。」玉「吊れるの。」琴「早く松が除れて了へば好い。」

ト云ひながら銚子を持つ。

江「大層眞面目のやうだから、お前さんに上げやう。」琴「然う、有難う、あなたお悪かつたッて、もうお風邪は悉皆好いの。」江「昨日あたりから、寒氣もしなくなつたから、漸くお正月の首になつたのさ。」琴「まだお顔の色が本當ぢやないわね、然し今日は好く入らしッて下すッた、もうお目には掛かれない事とばかり思つて居たんですの。」玉「大層例になく斷念が好いんだね。」琴「好くッたッて悪くッたッて、元日から音沙汰なし、お正月並のお約束なんぞ、此方にして戴かうとは思ひませんわ。」玉「分かッてるよ。」

琴「お目に掛かれない位なら、何も。」

ト少し涙ぐみ、

琴「お仲さん達にだッて、随分面目が好かアありませんでした。」玉「年末のお取込の中で、病人が電話を掛けにお起きなされもしなからうぢやないか、ねエあなた、これが番頭さんや小僧さんに頼まれる用ぢやなし。」琴「そりやア

然うかも知れませんがね、お言傳を他人のやうに伺つて見た處で、それで氣の濟むものでもなし、皆わたしが悪いんでせう、先ア一つ戴きませう。」

ト江本から盃を貰ふと、お玉が酌をする。

玉「今日は根つから飲んで居ないんだね。」琴「然うでもないんですけど、江本さんは酔漢がお嫌ひだから、一生懸命に慎んで居るんです。」江「然う切口上でお慎みにならないだつて、御遠慮なくおへべりなさい。」玉「いつもの通り世話を焼かして、介抱をしてお貰ひなさいな、あなた、餘り駄々を捏ねたら、擲つておやんなさいまし。」

ト立つて行くお玉に、

琴「打たれる身になつて見たい。」

ト後から獨語。

玉「そんならもう外へ行かれないやうに、打倒してお戴きな。」

ト笑ひながら行つた後には二人限り。

江「爰へ来てお炙りな。」琴「澤山、ほつくくとしますの。」江「先ア其様な事を云はないで、ね。」琴「それよりか一盞戴きませう。」江「上げるから爰へお出でよ、よ、サ、些と側へ来てお見せな。」

ト立つて行つて、お琴の手を取り連れて来て、自分の側に並んで坐らせれば、其の通りになつてそれでも黙つてゐる。

江「サア、注がう。」琴「有難う。」

トぐつと飲み、

琴「モウ二三杯注いで頂戴な、今日がわたしのお正月なんですから。」江「そんなら尙と機嫌よくお爲な、わたしが風邪を冒いたからつて、それで愛想盡かしをされちやア話まらないね、年末から十幾日振だ、機嫌よく晩の御飯でも一緒に食べやう。」琴「エ。」江「煩つて來られないのを、知らせなかつたとか、

空約束だとか云つて怒つたツて云ふけど、此の若旦那なく家にも氣兼ねがあるんだから。」琴「然う、それであなた、今日は何うして入らしつたの。」

江「モウ好いやね。」

ト膝に引寄せ、後から覗くやうにして態と小聲。

江「これから何處へ行く、エ、何軒廻るの、エ、オイ。」琴「知りませぬね。」

江「直ぐ行くのかい。」琴「そんな事は自分に聞いて御覽なさいな。」江「然うか。」

トばかり顔と顔。

江「熱いな、飲んだんだね。」

ト聞くと其の儘、身を捻向けて床の間なる鉢植の梅の蕾を一輪取つて前歯に噛み、

琴「皆な苦勞をするんだね。」

雪

其筋よりの御達しに付、樂屋への御通りは堅く御断り、と書いて貼つたる揚幕裏の戸を開けて、怖れ氣もなく正面入口の大廊下に現れしは、年の頃は二十一二、三方から前髪と髪とで攻付けし下膨れの顔を、舞臺の女形のやうに巧く眞つ白に塗立てたる藝妓年松、銀杏返しに紋付の羽織何處までも色々しく、觸らは溶けん風情なり。

後より附いて出でしは、此の座の立者菊之丞の男衆梅造、四十前後の不意氣

な男、東の棧敷裏まで送つて戸を開けて、無言のまゝ頭を下けて引返す。場所にては、擴がツて觀て居た四人、氣は心の會釋に膝を動かして、一番前の左を座蒲團の二割増し程に廣く空地にする。

「好いわ、あたし最早歸るから。」

ト年松は鷹揚なり、戸の側に坐つたる大年増おりく、振向いて斜に見上げ、

「もう些とだから我慢なさいな、エ、一寸でも見て。」

ト丁寧な物言ひ、言葉ばかりを速記にしたら、素人同志の交際なり。

「エ、でもね、今部屋で聞いたら、此の大切はソ、ラないで、眞面目に演るんですッて。」「然う、詰まらないのねエ、あたし忌だわ、菊兄さんの時次郎が、必と何か演ると思つたのに。」「折角千秋樂の此の寒い日に來たのに。」ト半玉と十七八のは納まらぬ氣色、年松は廊下に立つたまよ、金剛石の光る手先を出して、

「取つて頂戴な。」

ト手提に一寸指さしをする。

「ぢやア皆一緒に出掛けませう、眞面目な處は幾度も見たんだから。」

トおりく姐さんの義理立、來るも義理歸るも義理は難い世なり。

「然う、随分今まで辛抱したわねエ、チャンと大切まで。」

ト云ふに皆々雜物を取纏めて、口元から一人々々廊下へ出る。

「オウ好い風。」

ト十八九の、根の高い島田に結つたのが身を蹙めて宜く科、半玉は頓狂な聲。

「アラ雪が降つてるわよ、ねエ、嬉しいぢやないの。」

ト云ふに戸外を硝子障子越しに視れば、チラ／＼と白いもの、新造も年増も口を揃へて捨臺詞の中に、年松ばかりは熱と視たまよ、黙つて先に立つて階段を下へ、廊下續きに茶屋へ行く。

やがて門口に五臺の腕車、二臺は芝居前を斜向ふの通りへ、三臺は銀座通りへ出る折しも、服部の大時計は九時を打ち始める。

如月の夜の雪、降りしきるとまでは無けれど、廣場の風に狂ひて淋き十時半過ぎ、東京驛の一等待合室に入り来りしは、大切の幕の時次郎の顔を拭いたまよ、湯にも入らず自動車にて駈付けし菊之丞、帽子目深に襟巻を厚くして薄鼠の無地とも見える霜降の外套、紺足袋に革裏の草履穿き、遠巻に挨拶する芝居の人達や懇意の者に、軽き會釋の愛嬌笑ひ、其の側に衝と寄つたは菊香會と云ふ連中の幹事千代崎。

「此の汽車で行くと、名古屋へ幾時に着くんだい。」「明日の朝の九時四十八分だとか云ひましたツけ。」「ダラ／＼汽車は堪へるね、大略十一時間だぜ。」「何んでも明日の午前に着いて、午つから一寸道具を見て、晩に顔繫をやら

うと云ふんだから、實に驚いちまう。」

ト愚痴のやうに笑ふ側から、

「此の十一時の前の、神戸急行の九時ので御座いますと、明朝の六時二十分で、幾らか時間が短う御座いますが、今のお芝居が、何せ平常は十時五十七分とやらの打出しと承りましたで。」

ト二人の顔を見比べながら、小腰を屈め／＼云ふは、乗込み先の名古屋の芝居から、出迎に來て居る男、千代崎は巻煙草に火を點けてスツと吸ひ、

「鑪合はせに能く然う稼ぐな、蓄つて仕様がないだらう。」「借金が。」

ト菊之丞は笑つて居る、名古屋のは慇懃に、

「能うお目にも掛かりませんで御座いましたが、奥さんは如何で。」「エ、有難う、相變らず醫者とばかり仲が好くツてね。」

ト云ふ處へ、弟子男衆交りに四五人。

「もう十四五分ですから、お入んなさいませんか。」「徐々切り始めましたから。」

ト云ふにゾロく、女交りに三十人許、生半に物の響きのうら寒き場内を、昇降場へと出で行く途にて、スーツと寄つて来しは年松、遠慮もなく肩を並べて歩きながら、

「家へ一寸寄つて着物を着更へて、随分先刻から来て居たのよ。」「島本が糞真面目に浦里を演やアがるもんだから、幾らも早くなりやアしない、随分二番目ぢやア稼出して置いたんだがナ。」「名古屋を終つたら、成りたけ早く歸つて来て下さいよ、詰らない田舎なんぞへ行かないでね。」「そんな事よか、都合して早く来てくれ、ヨ、好いか。」「エ、阿母さんの熱さへ除れりやア。」

ト話の中に汽車の側、菊之丞は人々に世話をされて、二等の寢臺車に入ると、年松も續いて入る、弟子や附人達は三等と二等へ。

新橋驛に着いたる下ノ關行の第十五列車、菊之丞は淋さうな顔をして、

「これから一人で眠て行くと爲やう、夜汽車は幾ら馴れても忌だ。」

ト云へば、年松は何やら今受取りし紙包の物を、帯の間に挟み、

「キの字でも御一緒ならねエ。」

ト莞爾、何處ぞの馴染の事なるべし。

「もう出るだらう、下りといで。」「紛かさなくツたツて好いわ。」

ト外に下立つて、窓の際にて又立話。

「本當に早く歸つて来て頂戴よ、ね。」「飛んだ不如歸だ。」「戯言を云はずにね、此方から行かれないかも知れないんですから。」

ト云ふ中に合圖の笛、頷き合へる互の笑顔は遠ざかりて、氷のやうなる風の中に、人の足音の響き出す。

改札口を出し年松は、一等待合室を差覗きしが、其のまゝに入つて、腰を掛けたる一人の男の側に立ち、

「寒かつたでせう。」

ト肱掛に載せたる其の腕に手を置いて熟と視る、男は三十二三、色淺黒く、眼鼻立キツバリと、些と凄味あれども愛嬌あり、新橋の球戯場又新軒の賣物佐野と云ふ球に掛けての有名の巧者。

「生憎な降雪と云ひたいが、先アお詠へだ、自動車が待たしてあるんだ、何うだい、水神へでも遠乗と出掛けやうぢや無いか。」然うねえ。「何が然うねえだ。」「好けないの。」「然うネと臺詞尻を軽くやツてくれ、立派な二番目役者に仕込まれて居る癖に。」又。「ぢやア何うなんだい。」電話を掛けた時に、ちらついて来たでせう、雪見にぐらるな事はチャンとね。「おかやの

方は何うだ。」阿母さん。「ウム。」おかやは随分ね、いくら家の阿母さんが業突張だつて。「失敬々々、何うも失禮、だけでもね、時次郎の旅行へ、點頭を掉つて一緒に遣らなかつた處なんざア、先ア。」だつて若、慾が薄くツてあたしを遣つたら何うなの。「早速神経衰弱だな。」

ト云ひながら、壁に掛かれる時計を見、

「もう二十分だ、旦那様は品川あたりをお通りだらう、エ、痛エな。」運轉手が欠をして居るでせうから、行きませうよ。」

ト懐中時計を出して見て、掛かつて居るのとキツカリ合はせる。

「大熱の方へは。」家。「ウム、本當に熱があるのか。」好いわよ。」

ト打連れて室を出ながら、

「何時もの運轉手。」鈍痴な事をするものか、ズツと走らせれば好いんだ。」

「好いけど、一寸出雲町の處へ寄つて。」出雲町。「目を光らかして居たか

ら、少し何なの、一寸寄つて取つて行くわ。」「樹の根へでも埋めてあるのか。」

「然うよ。」

ト先に立つ、佐野は外套の下にて大島の衣の前を搔合はせ、

「寒いな、自動車にやア蒸汽の通つた寢臺が無いからな。」

襟卷の片端にて、半分顔を隠しながら自動車を下りると其のまよ、出雲町なる横通りの歩道を衝つと東都晝夜貯蓄銀行の扉の内へ入りし年松、小形の特別當座の通帳を窓に無言で出すを、十六七の詰襟の洋服着たる綺麗な男が受取り、

「お預けになるんですね。」

ト帳面に添へし紙幣を三度數へて、

「三百圓で御座いますね。」

めぐりあひ

私は毎月一回日本橋の橋頭俱樂部で開かれる清元の精勵會へ行く、清元が解かるのでもなく、又好きなものでもなく、私の友人が此の會の後押をしてゐる關係で、會場の世話焼に出掛けるのである。

休憩が済んで、今又一番始まつた途端、階段の上の板の間に立膝で聽いてゐた私に、「旦那、一寸お顔を。」と樂屋掛の男が密と云ふ、頷いて下りて行くと、下の廊下の壁際に寄つて、「あの御婦人が。」と云つて男は受附の方へ行

つて了ふ。

油氣なしの銀杏返し、地味な扮装の女は誰が目にも藝妓とは知れ切つた細面の中年増、つゝまじやかに寄つて来て、「あなた村山さんでゐらっしゃいますね。」と云ふ、「エ、。」と返事はしたものの、儲私には覺えがない。

それと直ぐ知つた相手は、賢氣な眼に愛嬌を見せながら、「わたくし暫らくお目に掛かりませんでしたから、お忘れでせう、お分かりになりませんか。」と眞面目な中にも莞爾する、これ程先方で云ふものを、それでもまだ思出せぬとは、不實者との引續いての冷かしが辛いと、私は相手を熟と視たが、久しく遊びを止めてゐる身には、俄に手繰り出すべき便とてもない。

「わたくし新橋に居りましたお菊ですの、お思出しになつて。」と懐かしさうな目を輝かす、私はハツと思つたが、それでもまだ成程とは合點の行かぬまでに、女の様子は變つてゐる、「然うでしたか」と私は溜息のやうな返事を

した。

「随分變りましたでせう、あれから最早十三年になりますもの、それでもあなたは何時もお變りがなくつて。」と改めて小腰を屈める、私も誘はれて一寸頭を下けたが、倅染々と視る落着もなく、狼狽へたやうに、「悉皆見違ひて了つて、然うして今は。」「柳橋に居りますの、高砂家の菊次つて。」「然うですか。」と私は初めて一息した。

慌だしさの氣が靜まつて、不圖入口の方を向くと、受附の係の人や、其處に立話をしてゐる二三の藝人等は、大抵此方を見てゐるらしい、長い廊下は一直線に見通しである。

菊次は白い素顔をホンノリと紅くして、「あなたはお若いのね、わたくしア悉皆お婆アさんになつて了ひましたわ。」と熟と見上げる、私は私の口のあたり

に、其の額際の寄れる菊次を、又更に見ると共に、心は何となく騒ぐやうに

覺えた、お互がまだ初心な頃、二人は初心な戀をした、而して其の戀は果敢かつた。

「あなた毎月來てゐらっしゃいますのね。」「エ、よく知つてますね。」「わたくし此の春から會員に入れられたんで、時々参りますの、それで初めての時、何うもあなたに違ひないと思つたんですけど、迂闊した事を云つて、若し違つてゐると思つて、ホ、樂屋の人に聞いて見やうと思つても、何とか云はれさうで。」と年には似ぬ若い笑顔にも、尙且昔の佛は無い、人の顔立も様子も、斯うまでに變れば變るものか、それにしても、江戸向きな立派な藝妓になつたものと、初めて染々と顔を視た私は「幾歳になつたい。」と思はず昔の氣で云つた、「丁度になりますの、あなたは五ですな。」「ア、モウ十幾年なんてなるんだね、あれから何うしたの。」「お目に掛かれなくなつてから、暫らくまだ彼處にゐて、それから直ぐ今の土地へ來て丁度十年になり

ますの。」「餘り浮氣をするからだらう。」と小聲ながらも擲擻ふと、何故か少し染めながら、「それには種々なことがありましてね、それでも、今ぢやア兩親も藥研堀で、元の三味線屋をして居りますから。」「そりやア何よりだ、近所でもあるし。」「わたくしの家は、深川亭の前を少し行つた左つ側で、堀の内には太い梧桐の樹が一本ありますから、直ぐ知れますわ。」「何れ氣樂なんだらう。」「半玉が一人置いてあるツ限り、誰も居りませんから、是非一遍入らして下さいましたな、それこそ種々お話が御座いますわ。」「何れ其の中。」「あなた、今夜ズツとお宅へお歸りになるの。」「エ、終ひ少し前に逃出す意なんです。」「お宅は依然木挽町。」と問はれて私は頷くばかり、新橋に居た時のお菊は、用もないに私の店の前を、月に幾度となく通つたのであつた。チーン／＼といふ音は、側なる藝人控所と札を懸けたる樂屋の時計、モウ十時らしい、と思つて受附の方を見ると、何時か人影もなくなつて、電燈の下

に點した蠟燭の火先が、卓子の上にチラ／＼と揺らいで、初夏の夜の風は立關から、拭込んだ板の間をスル／＼と涉つて来る。

「夜の會だから、義理で来るにしても困るでせう。」と何の料簡もなく、私は詰まらぬ事を訊いた、何時まで立話も外見でなし、と云つて、本意なく別れたくもなし、私は實の處色氣離れて、菊次の今一層打解けた様子を見たく思つたのである。

「何時も来る時には、終までチャンと居りますの、何うせ年中閑なんですもの。」「遊んでるられりやア結構ぢやありませんか。」「あなた。」「エ。」「わたくしあなたにお目に掛かりたくつて、それで必と此の會へ來ますのよ。」とボツとしたと思ふと又、意味も無氣に微笑んだ。

「今度一度緩り何處かでお目に掛かりませう。」と何時か此方は改まり切つて了つた、菊次は若々しく首を傾けて、「二三日中にお寄んなすつて下さいな、

本當に誰もるないんですから。」

「有難う。」と斯う云つて了つては、話は一先終らねばならぬ、「何れ後程」と私は別れやうとしたが、何處へといふ目的もない、菊次が當然行くべき二階の演藝場へ先に立つて行くも異なるものと、用もないに私は樂屋へ入つてしまつた。

入ると種々藝人に話し掛けられる、彼の肝煎の友人も居て何の彼のと用談が出て来る、その中急用があるとして家からの電話、菊次の姿は頭の中にのみ繰返し見て別れて了つた。

その後十日程経つて、同じ倶楽部の長唄會へ一寸行くと、玄關口で、今歸つて行く菊次に出逢つた、丸髻の四十前後の肥つた女と二人連れであつたが、會釋して出て行きながら、「是非今月中に一度ね。」と小聲で云つた、私は受附の前に立つて、入場券を出しつゝ表を見ると、先方でも振返つたが、笑顔は